昭和46年12月12日発行通巻40号(毎日曜日発行)　昭和46年2月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

朝日=ラルース

12/12
220円
40

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

総監修

岡田　　要　日本学士院会員
末廣　恭雄　東京大学名誉教授
古川　晴男　前東京学芸大学教授
宮地伝三郎　京都大学名誉教授
山階　芳麿　山階鳥類研究所理事長

編集委員

阿部　宗明　農林省東海区水産研究所技官
上野　俊一　国立科学博物館研究官
浦本　昌紀　山階鳥類研究所員
小原　秀雄　女子栄養大学教授
日高　敏隆　東京農工大学教授
堀越　増興　東京大学総合研究資料館助教授

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説(２)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。《1～64号の内容は表３参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけではなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

『私たちの仲間』のページ　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〟として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〟がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第１号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

目　次

世界動物百科　第40号

カラーページ

奇蹄目（つづき）
- ウマ科　7
  - ウマ属　12
    - ウマ　12
      - タルパン　12
      - プルツェワルスキーウマ　13
      - 家ウマ　19

表紙　ウマの親子　Ph. Prenzel-Press
表３　**ギャラリー**　泰西王侯騎馬図　高階秀爾

監修　野村晋一（東京大学教授）
翻訳　加藤尚宏（早稲田大学文学部講師）

私たちの仲間

日本史を駆けた〝馬〟　林田重幸　3
在来種の現状とその源流

カラーページ解説・注
日本の種馬所と種馬牧場
ウマの進化
ウマの生涯　野村晋一　27

１人のイノシシに　畑　正憲　28
ヒグマと２人のイノシシ　38

熊（くま）　串田孫一　29
山路でのであい　２

飼育自慢　７
キバノロ〈多摩動物公園〉　30
ペット相談室・仲間のひろば・裏表紙説明

凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注１〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，１部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100 TEL 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島３－３　〒530 TEL 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802 TEL 093－53－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄１－３－３　〒460 TEL052－231－8131

次号予告

12月８日発売



世界動物百科
41号　12／19

カラーページ

奇蹄目
□ウマ科　ウマ属　ウマ（つづき）
家ウマの種類
純血種　アラブ，バルブ，サラブレッド
　アングロアラブ
半血種
乗馬　ハンター，ハクニー，トロッター
　コブ，アンダルシアン
輓馬　ペルシュロン，ブーロンネ
　アルデンナー，ノール輓馬　オスア
　コントワ，ブルトン，シャイヤー
雑　種　ポワトゥ，ポニー，カマルグ馬
　ピレネー馬，ムスタング
　日本の在来馬，チャド馬

私たちの仲間

乗　馬　歴　木下順二
暗く明るい夜　畑　正憲
ヒグマと２人のイノシシ　39
兎を追う鼬　串田孫一
山路でのであい　３
ウマの毛色とその遺伝因子ほか　野村晋一
カラーページ解説
飼育自慢　８
タイラ〈愛媛県立道後動物園〉
ジューク・ボックス　G.5プラス1
もうひとつの世界　26

©1971 ASAHI SHIMBUN, Tokyo, pour la langue japonaise・Librairie LAROUSSE, Paris・RIZZOLI EDITORE, Milan.

日本史を駆けた〝馬〟

——在来種の現状とその源流——

林田重幸

私たちの仲間
40号….12月12日

ウマが民族の移動や文化の交流に果たした影響はきわめて大きく，世界歴史の変遷と文化の進展は，ウマの背と肢によってなされたといっても過言ではない。マホメットが「天国とは，コーランと美人の胸と馬の背にあり」といってウマをたいせつにさせたのは，布教のためウマの機動力を必要としたためである。また，成吉思汗（ジンギスカン）が西方に勢力をのばしたのは，騎馬民族としてもっていたウマの力であり，ナポレオンがモスクワに進撃して冬将軍に敗れたのも，ウマの力を過信したためでもあった。

日本においても，歴史に登場したウマの活躍はめざましい。源平の戦いでの平氏の滅亡も，騎馬に巧みな関東武士の精悍さの勝利であり，東海道五十三次をはじめとする諸街道の宿場の主役はウマの背であり，肢であった。また浅野内匠頭の自刃をいちはやく赤穂へ伝えた早馬の力など，これまでの日本の農耕の発達，軍事，運輸はもっぱらウマの力であったわけだ。

ところが，農機具の機械化，自動車やトラックの発達はウマをまったく過去のものにしてしまった。10数年前には，田畑を耕すウマの姿，馬車を引くウマののどかさが見られたものであるが，今ではすっかりその姿を消し，今日の青少年には，ウマといえば競走馬しか脳裡に浮かんでこないだろう。

そこで日本民族の友として，その歴史に血のつながりをもつ，愛すべき日本固有のウマの歴史をさかのぼってみたい。

古文書には「馬なし」とあるが

3世紀の末，漢魏の人が朝鮮，対馬，壱岐を通って北九州の末盧国（佐賀県松浦）に上陸し，もの珍しそうに北九州の辺を歩きまわって，見聞したことを報告している。これがいわゆる『魏志倭人伝』であって，わが国の最古の状態を書き記した貴重な文献である。この書に，倭には「牛馬虎豹羊鵲なし」と書いてある。当時の中国は，漢，三国と続く時代であって，すでに牛馬羊豚犬鶏の6畜をそなえていた時代である。中国人の目には本国や朝鮮と違って，日本（それも九州の一部であろうが）には，牛馬羊の家畜，虎豹のような猛獣，高麗鴉といわれる鵲が見られなかったのである。

しかし，はたして「馬」がいなかったのであろうか。

明治以来，考古学の発達によって，わが国古代の様相がしだいに明らかになりつつあるとき，弥生遺跡である愛知県熱田の高倉貝塚から，ウマの中手骨が出てきた。この骨体には，25本の横線が刻みこまれてあった。鳥居龍蔵博士は「当時朝鮮あたりから連れてきたもので，沈彫があるのは，何か呪術的な意味があるのだろう」と述べた。次いで1920（大正9）年，長谷部言人博士らが縄文遺跡である鹿児島県出水貝塚を発掘し，ウマの歯と骨を得て，「日本石器時代に馬あり」と報告したのである。

世紀前200年から世紀後200年の時代とされる弥生時代に，次いで世紀前200年以前と考えられる縄文時代の貝塚から，ウマの遺物が出てきたのであるから，『魏志倭人伝』にウマがないとするのは誤りで，ウマがいてもその数が少なく，漢魏の人の目にとまらなかったのであろう。筑紫平野の遠賀川流域の弥生遺跡にもウマの骨が出ているから，3世紀の北九州にウマがいたのは事実である。

わが国のもっとも古いウマの化石として，岐阜県可児郡平牧村の第三紀中新世地層から出土したものは，松本彦七郎博士がアンキテリウム（*Anchitherium*）に該当するといい，また，長野県北安曇郡美麻村の第三紀鮮新世地層から出たウマの化石について槇山次郎博士は，小形で3趾をもち，その臼歯も進化していないプリオヒップスの亜種（*Pliohippus sp.*）であるとしている。

三趾馬とは，3本の指をもつウマのことである。現在のウマは1趾，つまりわれわれの手足でいう中指だけが残っているのであるが，遠いウマの祖先は5本の指をもっていた。第三紀始新世（約5000万年前）に4指をもつものが，北アメリカにエオヒップス（*Eohippus*）として現われ，その後，中新世・鮮新世（2800万年前から150万年前）には3指（つまり三趾馬）をもっていたのである。このころ，アメリカ大陸とアジア大陸は陸続きであったから，三趾馬がベーリング地峡を通ってアジア大陸にきたと考えられている。

この化石時代には，日本列島も大陸と陸続きであったから，日本にもこの三趾馬が存在したということも否定できないが，いずれにしてもこのウマは，やがて絶滅してしまったものである。

現在の在来馬の祖先は，洪積世のころ（50万～100万年前），中央アジアのあたりに残っていた野生馬から出発すると考えられているもので，化石馬の絶滅以後，縄文時代の日本は野生馬が存在しうる環境ではなかったことから，貝塚出土のウマは，東アジアのどこからか運ばれてきたウマに由来するものと考えるべきであろう。

そこで，日本在来馬が現在どのような姿で存在しているかを紹介するとともにそこから逆に，日本のウマの歴史を，源流に向かってさかのぼってみようと思う。

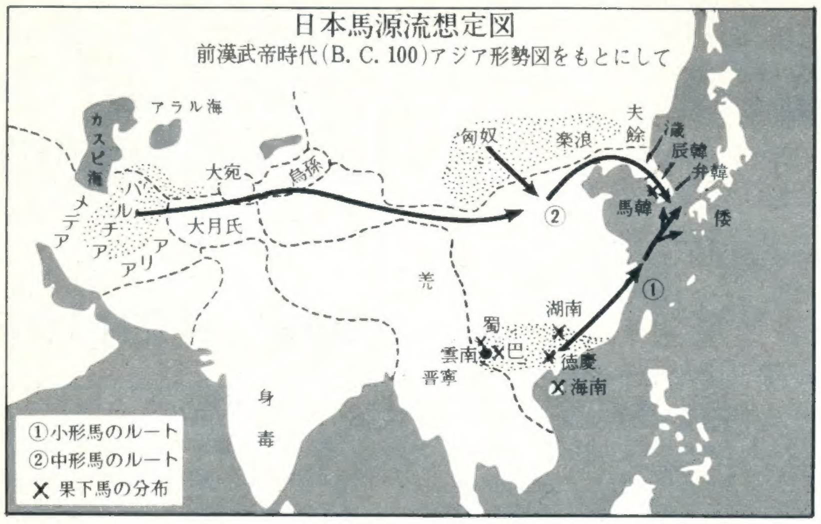
日本固有の在来馬の現況

明治年間，西欧文化の流入とともに，産業上，軍事上の必要から，日本在来馬の改良が叫ばれ，とくに日露戦争後，政府が積極的に西欧馬種による改良を進めた結果，1935（昭和10）年ごろには，日本の総馬数150万は，ほとんど全部雑種





青銅貯具容器上の飾り（上）
青銅洗形貯具容器の装飾にある馬（右）
雲南省晋寧石寨山古墓のもの　雲南省博物館編『晋寧石寨山古墓群』1956 より



になってしまった。ただ特殊な地域のウマだけがむかしながらの姿をとどめ，絶滅寸前ではあるが保護され現在にいたっている。

都井の御崎馬＝＝宮崎県日南海岸の最南端，都井岬に野生状態で約50頭が放牧されている。これは元禄年間以降，秋月藩の牧場であったのが，その当時のウマの姿で保護され，現在，国の文化財として天然記念物に指定されている。

木曽馬＝＝木曽は古来馬産地であって，徳川時代の宿場のウマの供給地であった。現在長野県の御岳山麓の開田村に50頭内外残っているが，純粋なものはきわめて少ない。

北海道和種＝＝通称道産子と呼ばれ，道内に数百頭残っているといわれるが，とくに道南（渡島，檜山地区）に多く，約350頭といわれている。北海道にはもともとウマがいなかったので，幕末以降に東北地方の南部馬が導入され，この地の風土にあったウマになったのである。

これらのウマにはスマートさはないが，体質頑健，肢蹄堅牢，粗飼に耐え，まえがみ，たてがみが多く，顔面や四肢の下端の白徴（白い毛）がないのが特徴で，その体高（肩の上端から地面まで）が124～140センチ，平均132センチである。このようなウマが徳川時代のウマであり，源平時代の武士のウマであったのである。

トカラ馬＝＝前記の御崎馬，木曽馬，北海道和種などと異なった，より小形の馬が九州南西海域の吐噶喇群島宝島に現存している。まったくの孤島であるために，改良もされないで，純粋の形で残っていた。戦前100頭を越えたこともあったが，戦後減少し，1952（昭和27）年当時は42頭を数えるにすぎなかった。小形ではあるが，体質頑健，肢蹄堅牢，白徴なく，体高108～122センチ，平均115センチ，体重190キロ内外で，御崎馬，木曽馬の約3分の2の体量である。このような小形なウマは，幕末に土佐や長崎県の五島にもいたのである。

ここで一応，御崎馬，木曽馬，北海道和種を中形馬，トカラ馬を小形馬としておこう（北ヨーロッパにみられるような重種系の大形のウマは，日本にいなかったから，中形，小形とした）。この小形馬が日本の先史時代に最初に出現するウマであるから，記憶にとどめていただきたい。

遺跡にみる先史時代のウマ

諸方の遺跡から発掘されるウマの遺物は，一般に歯が多く，骨は少ない。歯が多いのは目につきやすいことと，保存されやすいためであろう。

筆者は諸大学の人類・考古学教室に保管されている馬骨を調べたが，その結果をまとめると次のようになる。

余山（千葉県銚子・縄文），野上（栃木県・縄文），平出（長野県・縄文），瓜郷（愛知県・弥生），田結（長崎県・弥生），カラカミ，原の辻（長崎県壱岐・弥生），出水（鹿児島・縄文）のウマの四肢骨は小形馬であり，また鴨居（神奈川・弥生），平井（愛知・縄文），熱田（愛知・弥生），田端（東京・弥生），美林里（朝鮮・金石器）のウマは中形馬である。また田結，原の辻の馬骨のなかには，小形・中形の中間的なものもある。

沈彫25本を有する熱田貝塚のウマの骨の大きさは，体高136センチの御崎馬の骨と一致するから，その体高は136センチ前後であって，現存の在来馬のうちでも大きい部にはいる。また先史時代馬の骨の太さは，蒙古馬のように太くはない。

このように，先史時代のウマも，小形・中形の2形に分けることができる。そして，ウマがはじめて出現するのは縄文後期のころと考えられ，縄文・弥生期を通じて小形馬が多いが，弥生期にはいると中形馬が現われるようである。

小形馬の出現時期を確認するために，1920（大正9）年長谷部博士が，はじめて「石器時代に馬あり」と報告された鹿児島県出水貝塚を，1953（昭和28）年に東大人類学教室と発掘したことがある。この貝塚は縄文早期・中期・後期の土器を含んでいるが，馬歯6，骨1はいずれも，後期の土器である市来式土器を伴ったきれいな貝層中にあった。この骨と歯は，いずれもトカラ馬ほどの大きさのものであって，その歯は12歳，20歳前後，25歳前後の老齢馬のものであった。千葉県銚子の余山貝塚馬は前記のように小形馬であるが，ほとんど完全な1頭分の骨が，貝層下に埋葬された状態で出土したことは，発掘に当たった野口義麿氏の証言されたことである。このウマの臼歯はほとんど摩滅しつくされ，25歳前後と判定される。この余山例は縄文晩期に属するものである。また長野県平出遺跡のウマも小形馬で，20歳前後と判定される。

ウマの寿命は30歳を越すこともあるが，ウマの20歳，25歳は，人でいえば70歳，80歳の老齢である。このように，(1)古代馬が一般に老齢であり，(2)貝塚からはイノシシやシカの骨が多く出るが，これらの骨は骨髄まで食用に供したため，人為的破砕がみられるのに，馬骨は破砕もなくそのまま出土する。(3)余山貝塚の例のように，埋葬された状態で出る。この3点から，ウマは先史時代人によって，家畜としてたいせつに飼われていたものと想像される。

故長谷部博士は日本先史時代馬の馬骨を計測し，「日本石器時代には出水・田結例の如き小形馬と，平井・鴨居例の如き中形馬の2種があったとし，この小形・中形の相互の系統関係，その原産地，移入経路等考究すべき問題は多々あるが，今は如何ともなし得ない」と約30年前に報ぜられたが，この小形はトカラ馬ほどのものであり，中形が御崎・木曽馬ほどのものであったのである。

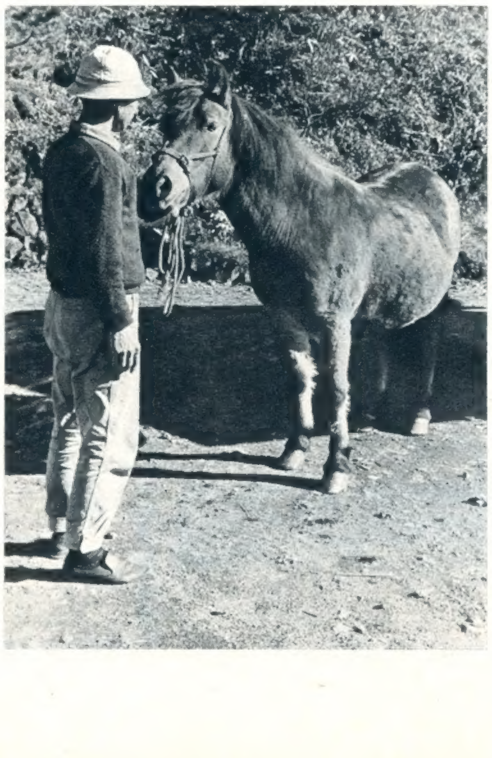
昭和41年春，帝塚山大学堅田直教授らによって，生駒山麓の日下遺跡が発掘されたとき，5世紀後半に埋葬されたと考えられる，後肢の一部を除いたほとんど完全な馬骨が出土した。筆者は一応，「12歳前後の雄で，体高125～130センチの大きさであろう」と判定しておいたが，その後，比較材料を入手して調査の結果，体高133センチ前後のものであった。これは蒙古馬，日本の中形馬の平均値に近いが，このウマの四肢骨は蒙古馬より細い。

ほとんど完全なこの馬骨は，当時のウマの形態を知るうえにきわめて重要な文化財と考えられる。

また去年夏，浜松市伊場遺跡から平安時代に属するウマの頭骨と後肢骨が出土したが，雄の成馬で体高115センチのトカラ馬のような小形馬であった。

文献に残る鎌倉時代のウマ

昭和28年東大人類学教室が，新田義貞の鎌倉攻め（1333年）およびその前後の戦闘で死没したと考えられる人骨を，鎌倉市材木座遺跡で発掘した。この遺跡からは多数の馬骨が人骨と入り乱れて出土し，この馬骨を調査する機会に恵まれた。


木曽馬　御岳山麓開田村にて　撮影　山田　新


御崎馬　撮影　筆者

出土した128本のウマの四肢骨を材料にして，当時のウマの体高を推定すると，109〜140センチ，平均129.5センチであって，主体は先史時代の中形馬，現在の御崎馬・木曽馬の大きさであるが，先史時代の小形馬や，小形・中形の中間的なものもあった（右図参照）。このウマは当時の軍馬であったのだから，当時のウマのうちでも大きなものが選ばれていたと考えられ，一般馬には小形馬もより多く存在していたのであろう。

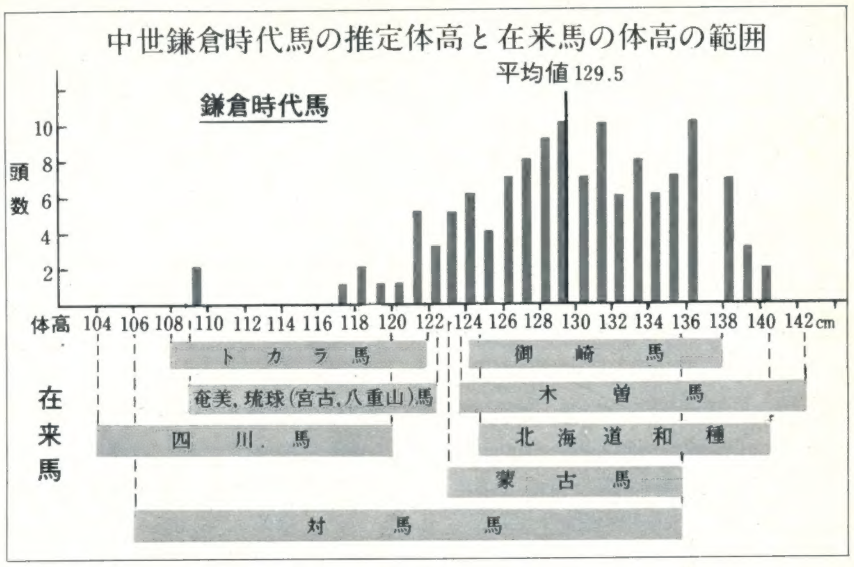
『塵添壒嚢鈔』に，「馬尺というは，4尺を定めてその上を1寸，2寸，3寸……7寸，8寸という。8寸に余るを長に余るといい，4尺に足らぬを駒という」とあり，『古今要覧』に「4尺（121センチ）の馬をよの常とするがゆえに小馬といい，4尺5寸（136.4センチ）を中馬，5尺（151.5センチ）を大馬といい，5尺以上は得がたかるべし」とある。これらの点から，鎌倉馬をみると，「よの常」とする4尺のウマから，中馬といわれる4尺5寸前後のものが多く，4尺以下のものも含まれる。

次に『源平盛衰記』『平治物語』に記載されている当時の名馬の体高をひろってみると，八田和家が頼朝に進上した黒馬は8寸，平山重秀から成田五郎に賜わった宿月毛は7寸余，藤原信頼が落馬した一部黒は8寸，重盛が仲綱に与えた黒馬は7寸，源三位頼政の木下鹿毛は7寸，浄法明春坊の烏黒，足利忠綱の連銭葦毛，佐奈田与一の夕顔はいずれも7寸，和田義盛の白浪は7寸5分，佐々木高綱の生唼は8寸，義経の青海波は7寸，大夫黒は6寸である。

ただ，『太平記』には，長崎悪四郎左衛門の坂東一の名馬一部黒，万里小路中納言藤房の甲斐の大黒，新田義貞自害直前の大馬水練栗毛，項羽の騅にも劣らぬといわれた畑二郎左衛門の塩津黒の4頭は，いずれも5尺3寸（160センチ）と記載されているが，『太平記』では文勢上，ことさらに誇大記載されているようである。

以上，『太平記』の5尺3寸（160センチ）を除くと，4尺6寸（139.4センチ），4尺7寸（142.4センチ），4尺8寸（145センチ）であって，名将のウマでも4尺8寸が限度である。

また，長幅指数（＝幅÷長さ×100）をみると，鎌倉馬の中手骨は13.2〜15.6，平均14.3，木曽馬13.2〜15.5，平均14.1とほぼ等しく，日本古代馬も13〜14台であるのに対して，蒙古馬では大きく15.8（筆者），16.3〜16.4（Wagner）を示している。中足骨でも同様である。



東アジアを駆けた古代馬

日本の先史時代に，小形・中形の2形があったとすれば，これらは大陸のいずれの地域からか導入されたと考えねばならない。したがって，東アジアの古代馬の状況を，中国を中心に考えてみることにしよう。

中国古代の三皇五帝の世に，ウマが飼育されたという古文献的事実はあるが，この時代は多分に神話的であるから，そのまま信ずることはできない。しかし，殷代にウマを利用したことは，安陽殷墟大司馬空車馬坑出土のウマによって知ることができる。殷に次ぐ国，春秋戦国，秦代には，ウマは軍馬として重要視されていた。

古来，中国は「南船北馬」といわれ，中国中原の地および以南はウマが少なく，ウシ，スイギュウの地帯である。ウマの生産地は中国北辺と西南山岳地帯（四川，雲南）に限られていた。したがって漢民族は，どの時代においても軍馬の整備に悩まされてきた。明の成祖は軍馬80万を必要としたが，位についたとき2万3000頭にすぎなかった。茶馬法，互市法の制度をつくり，北辺のウマを移入し，17年後に80万頭にした史実がある。

一方，中国北方の遊牧民匈奴は多くのウマをもっていて，土産である草原馬系統の蒙古馬のほかに，西域（中央アジア）から駿馬を入れ，騎馬民族的性格をもって，戦国時代（紀元前403〜221）のころ，南の漢民族を圧迫するようになった。この匈奴に対応するために，燕・趙・韓は長城を築き，秦の始皇帝はこれを補修して万里の長城を造った。漢代（紀元前202〜紀元後220）においても，匈奴に対しては戦々恐々たることは同様であって，馬政の充実と，敵匈奴から良馬を入れて，軍備の充実をはかったのであった。

漢の武帝は，西域（中央アジア）に駿馬がいることを知って，その獲得を熱望するあまり，前後2回にわたるフェルガナ遠征（紀元前104〜102）を行なった。それまで北方の遊牧民から，その他のウマおよび西域の駿馬を間接的に得ていた漢には，遠征後は直接に西域の大宛，烏孫，月氏を通して，天馬，千里馬，汗血馬と呼ばれる駿馬が続々とはいってくるようになった。いわゆる「絹の道」は「天馬の道」でもあったわけだ。

この駿馬は，アラル海，カスピ海からイラン高原にわたるアリアン馬であることは，史家によって数々の考証が行なわれている。このアリアン馬はウマの系統史からみると，現在の馬種のうち，もっとも気品に富んだアラビア馬のもとになったもので，アントニウスのタルパン系統高原馬と考えられる。したがって，漢代の中国には，北辺および蒙古にいた草原馬系統の蒙古馬のほかに，中央アジアからタルパン系統高原馬もはいって，それら相互のあいだに交雑も行なわれていたのである。

元封2年（紀元前109），漢の武帝は朝鮮に兵を送って，平壌付近を中心としていた衛氏朝鮮を平定，楽浪郡を設置し，その後400年間，漢文化の移植地として楽浪文化を形成したほどである。このように漢と朝鮮は密接な関係にあったから，中国漢代のウマが運輸その他のことで，当然，朝鮮半島にはいっていたであろう。そのウマは蒙古馬そのものでなくて，多分に西域馬の血液をもった中形馬であったと思われる。

日本の弥生期は，中国の漢代にあたるから，弥生遺跡から出る中形馬は朝鮮半



トカラ馬　宝島にて　撮影　筆者



トカラ馬　開聞岳にて　撮影　雨宮淳三

島からはいったものであろう。古墳時代が朝鮮半島と関係深かったことは，馬具や北方的な馬装をした埴輪によって推察することができる。ことに，古墳期後半に北方的馬具が古墳におさめられていることから〝騎馬民族説〟が出てくるのである。

『古事記』『日本書紀』の応神の条に，「百済王阿知岐を遣わして良馬二頭を献ずる」とあり，本居宣長はこの2頭のウマは，特殊な良馬であったろうというが，天馬・千里の馬の類であったかもしれない。前に記した日下遺跡（5世紀後半）出土の中形馬は，奈良に近い当時の放牧地と思われる生駒山麓から出土したもので，骨が蒙古馬のように太くないことは，天馬・千里の馬の類か，またはその流れをくむものであろうか。

北九州には装飾古墳が多い，とくにウマの絵が多い，なかでも，福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳の壁画はもっともすぐれたものである。6世紀のものといわれるが，両側に貴人の前にさしかけて日をさえぎるため「さいば」を配し，その間に下から波と舟，ウマを引く人物，さらに龍馬と考えられる怪獣が描かれている。人物の引くウマは，当時のふつうのウマ（小形馬）のようだが，元気のよい龍馬は，天馬，千里馬，汗血馬を表現しているようである。金関丈夫博士は水辺に種を求める図であろうといわれるが，ともかく朝鮮半島と関連して考えさせられる画である。

次には，わが国の縄文後期以降，弥生期に出る小形馬の源を捜さねばならない。

大陸に続く日本在来馬の源流

『史記』に「巴属沃野西近邛笮馬」と中国の南西山地，いわゆる巴属の地（四川，雲南）に，現在の四川馬のような小形馬が，笮馬の名で示されている。この記述が楚の荘王についての記載のなかにあるから，世紀前300年前後の状態を示しているものである。また，雲南省晋寧石寨山古墓の青銅洗形貯具容器は世紀前後のものといわれるが，このウマは笮馬であろう。時代はくだるが，13世紀の書『嶺外代答』に「馬高止四尺」「果下馬」「土産小駟」「小馬」「低馬」などの文字がたくさん記述されており，現在の四川・雲南・広東・海南・湖南などに小形馬が存在していたことを証明している。「果下馬」というのは，果樹の下をウマで通れるほどの小さなウマの意である。

また『嶺外代答』に，今のベトナム，タイにはウマがないといい，真臘（カンボジア），闍婆（ジャワ），三佛斉（スマトラ）の物産にもウマはないとしてある。おそらくこのころまで，インドシナ半島，東インド諸島にはウマはいなかったのだろう。

次に目を朝鮮半島に転ずると，漢の武帝が衛氏の朝鮮を平定（紀元前109）したとき，漢に5000頭のウマを献じているから，北朝鮮には多数のウマがいたようだ。一方『三国史記』に「夫余の地，名馬を出し，その俗匈奴に同じ」とある。東北区（旧満州）には匈奴のものと同形のウマがあり，夫余に接する北朝鮮にも，匈奴のウマに類する中形馬がいたのであろう。なおこれら家畜馬とどんな関係にあったかは不明であるが，徳永博士らによると，洪積世代に属する豆満江潼関鎮出土のウマの中手骨4，中足骨4の最大長からウマの体高を推定すると最低133センチで，中形馬の中以上であることを付記する。

ところが，朝鮮半島中部以南にも果下馬がいた。3世紀の著『三国志』東夷伝倭の条に，牛馬がない記載は前述したが，その濊の条に「出果下馬，漢桓時献之，馬高三尺，乗之可於果樹下行」とある。漢本土に見られない珍奇なウマとして献じたのであろう。さらに高句麗の条に「其馬皆小便　登山」，馬韓の条に「不知乗牛馬」，弁辰の条に「乗駕牛馬……男女近倭」とある。乗るのが常識であるウマが，韓では乗られずに荷馬に用いられた。



東アジア古代において，小形馬は西南中国大陸の四川・雲南から華南沿岸に，また朝鮮半島のとくに南部に果下馬，三尺馬の名で存在し，この分布圏は現在の小形馬分布地域に等しい。ただ，マレー半島以南の東インド諸島には，数世紀後までウマは認められない。つまり，世紀前古いころに四川・雲南から華南にかけて蒙古馬よりはるかに小さいウマが飼育され，この小形馬が，日本の先史時代の小形馬，古代朝鮮の果下馬と密接な関係をもつものと考える。

この小形馬が，わが国の縄文後期のころから弥生期に，華南沿岸から（琉球列島を島伝いにきたかどうかわからないにしても）九州へ，また日本の黒潮海域にはいったのであろう。また同時に朝鮮半島南部にもはいったであろう。沖縄本島地荒原貝塚（本土の縄文後期にあたる）から小形馬の歯が出たのも，当時沖縄は華南と関係があったからであろう。同時代の那覇城岳貝塚から出土の明刀銭は，中国大陸との交通が考えられる。

さらに，弥生期から古墳期にかけて，現在の御崎馬・木曽馬ほどの中形馬が朝鮮半島から導入された。これらは蒙古馬そのものではなく，中央アジアのタルパン系高原馬の血液を受けたものである。

最初に小形馬が，次いで中形馬が本邦にはいり，これらの2形馬は単独に，また交雑の形で存在したが，有史以降，軍事・運輸の必要から小形馬はしだいに減少し，中世鎌倉時代は中形馬が多数を占め，江戸末期には小形馬はただ土佐駒として残り，他は御崎馬・木曽馬・北海道和種のように中形馬だけになった。九州南西諸島には小形馬だけがはいって，中形馬がはいらなかったから，最近まで小形馬だけがいたのである。1952（昭和27）年ごろの対馬の対州馬は小形・中形が混然として，中世鎌倉時代馬の様相を呈していた。

新井白石が『東雅』に「我国の馬といふ者は，人代に及びて百済より奉りしに始りたるなり，疑しき事なれど，然るべき人のしるせしところなれば，必うけ伝へし所ありぬべし，或は我国の初よりありつるものは，たとへば今の土佐駒などいふ者の如くに，其形も小しきなりしに，今の如くなるものの出来し事は，百済より其国の馬を奉りしに始れりしにや，さらばウマとは大馬の謂にして，コマとは小馬の謂にやあるならむ」というが，この「初めよりありつるもの」がトカラ馬のような小形であったのである。

トカラ馬は現在薩摩半島南端の開聞自然公園に県天然記念物として保護されているが，日本人の祖先が最初に飼ったウマの姿を現在見せてくれるものであり，また都井の御崎馬（天然記念物指定），絶滅寸前の木曽馬，北海道和種は古代の中形馬，源平のウマなどの日本固有馬の姿を残している。

この夏，木曽開田村の人たちや北海道和種保存会のかたがたと，ウマの頸をなでながら，在来種保護について語りあったものだが，極少になってしまったこれらのウマの保存は，決して楽観できるものではない。■　（東京農工大学教授）

図表は平凡社刊
『日本民族と南方文化』より



北海道和種　　撮影　筆者





ウマ科　*Equidae*

ウマ科は奇蹄（きてい）目に属している。奇蹄目はサイ亜目とウマ亜目との２つに分かれており，サイ亜目にはサイ科とバク科が，ウマ亜目にはウマ科がそれぞれ属している。

ウマ科の動物は，現存の哺乳（ほにゅう）動物のなかでは中くらいといった大きさであり，幅が狭くて長い顔，肉づきのよい頸（くび），すらりとした四肢（しし）がその特徴である。大きな目は生き生きとし，耳は先がとがっていてよく動き，鼻孔は大きい。

からだには丸みがあり，全体が短くてつやのある毛でおおわれている。被毛は，尾と頸の上縁では長くのびていて，尾では尾毛となり，頸ではたてがみとなっている。長い頭骨のうち，脳を包む頭蓋（ずがい）骨は全体の３分の１で，あとは顔面骨である。

ウマ科の動物は，どれも性格が活動的で，しかも利口である。野生生活をしている種類も，他の動物とトラブルを起こさないようにふるまい，また，人間や大きな肉食獣に対しては，警戒して近寄らないようにしている。群れをつくって生活しており，昼夜の別なく行動するが，とりわけたそがれには移動が激しくなる。

奇蹄目の動物は，その体重をささえている四肢の軸になる線が，正面からみてそれぞれの肢（あし）の中心を通るような構造になっており，とくにウマ科において，その進化のあとがはっきりとあらわれている。すなわち，中指が他の指にくらべて著しく長く，太くなっている。

ひづめの構造

現代のウマ科の動物では，中指だけが残って，進化のはじめに５本あった指のうち，外側の２本はすっかり退化してなくなり，内側の２本は中指に沿った細い骨と化している。そして１本だけ残った中央の指の末端は，とうていつめとは思えない角質の構造物に変わっている。すなわちひづめ（蹄）である。

ひづめは次の３つからなっている。〔注１〕

1. 蹄壁（ていへき）　周囲を形づくっている部分。
2. 蹄底（ていてい）　底にある角質の板。
3. 蹄叉（ていさ）　蹄壁の後部〔蹄踵（ていしょう）〕から蹄底に向かってのびる三角形のいくらか弾力のある部分。

ひづめをつくっている角質は，材質の違った３つの層が積み重なってできており，角葉という内側の層が，一列に並んだ３個の指骨〔繋骨（けいこつ・第１指骨），冠骨（かんこつ・第２指骨），蹄骨（ていこつ・第３指骨）〕のいちばん先にある蹄骨を包む肉葉（にくよう）という柔らかい構造物に，しっかりとついている。肉葉は，皮膚とひづめとの境めで，分厚い肉冠という帯状のものになる。これがひづめの角質をつくりだす部分である。

ひづめは，肉葉に神経や血管が細かく分布



ウマ。ウマ科ウマ属。
ウマはウマ科のなかでもっともからだが大きく
そして，いろいろと人間の役にたっている。
たわむれるサラブレッドは，将来のダービー馬をめざしている。北海道浦河　日高育成牧場（上左）
撮影　今井寿恵

シマウマ。ウマ科ウマ属。
からだの白と黒の縞模様で，ウマと区別している。
ゼブラともいわれるが，これはアフリカ
コンゴ地方の土語に由来した呼び方である。
写真はグラントシマウマ。（上右）
PH. THOMAS-IMAGES ET TEXTES

ロバ。ウマ科ウマ属。
長い耳と，大きな蹄叉のついたひづめ。
親指の痕跡といわれる跗蟬が前肢にしかないことなどの特徴からウマやシマウマとは異なる。
粗食に耐え，力も強い有用な家畜である。（下）
PH. M. MOTRON-FOTOGRAM



していて，重要な触覚器官の役目も果たしている。ウマ科の動物が，夜間，でこぼこした地面をうまく歩けるのは，ひづめの鋭敏な感覚のおかげである。

ひづめのほかにも，ウマ科特有の角質構造があり，跗蟬（ふぜん）といって四肢（しし）の内側にこぶのようについている。退化した親指のつめだといわれ，ひづめにくらべやわらかい。

走るためのからだつき

ウマ科の動物のからだつきは，走るのに適したようになっている。この動物の食べ物のとり方〔野草を求めて移動する〕と，生活する環境〔樹木の少ない草原地帯〕からできあがったもので，外敵の攻撃をかわして逃げるための適応である。それでは，走るのにふさわしい特徴をみてみよう。

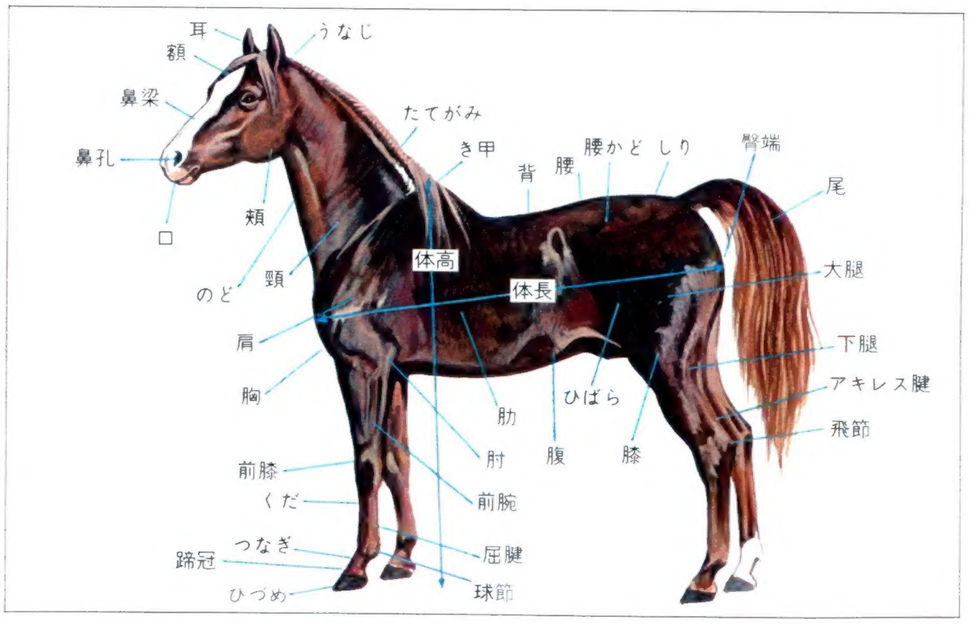
1．ウマ科の動物には鎖骨（さこつ）がなく，そのため胴体と前肢（ぜんし）とを結ぶ肩甲（けんこう）骨は，かなり大きく前後に動かせるから，肢（あし）全体の運動の振幅が大きくなる。
2．四肢は長く，人間の手や足に当たる中手骨（管骨ともいう）と指骨には，筋肉がついていない。だから四肢の先端はそのぶんだけ軽くなり，歩く速さの調節がしやすい。運動中には，呼吸や循環のために多くのエネルギーをさかねばならないので，肢の運動には，できるだけエネルギーを消費しないという構造上の特徴になっている。
3．四肢の筋肉は，胴体に近い部分についており，肢の先のほうにはない。このような筋肉のつき方は力学的にみてもむだがない。
4．肢の先は筋肉に乏しいが，そのかわりに弾力のある靱帯（じんたい）がたくさんついている。ギャロップのときは１本の肢で瞬間的に全重量をささえねばならないが，肢をわずかに屈曲してこの負担に耐える。靱帯は重みをささえ，次の瞬間にはその弾力で肢を強くのばして前進を助ける。

このような特徴はウマ科だけのものではなく，走ることの得意なレイヨウのような，他の有蹄（ゆうてい）類にもみることができる。

年齢を現わす歯

歯にも特徴がある。ウマ科には，上あご下あごに６本ずつの門歯がある。まん中の２本を鉗歯（かんし・第１門歯），次の２本を中間歯（第２門歯），両すみの２本を隅歯（ぐうし・第３門歯）という。ウマを売買する商人は，門歯の減りぐあいによって年齢を正確にいい





ウマの頭頸部。
ウマ科の動物の特徴は，筋肉に富んだ長い頸
長く幅の狭い頭，生き生きした目
先のとがったよく動く耳，長い鼻梁と
大きな鼻孔である。（上）

PH. AARONS

野生のウマ科動物の分布。
ウマ，シマウマ，ロバの野生分布域である。
第三紀には北半球全土に広く生息していたが
現在では，中央・西アジアとアフリカの一部
とに限られてしまった。（下左）

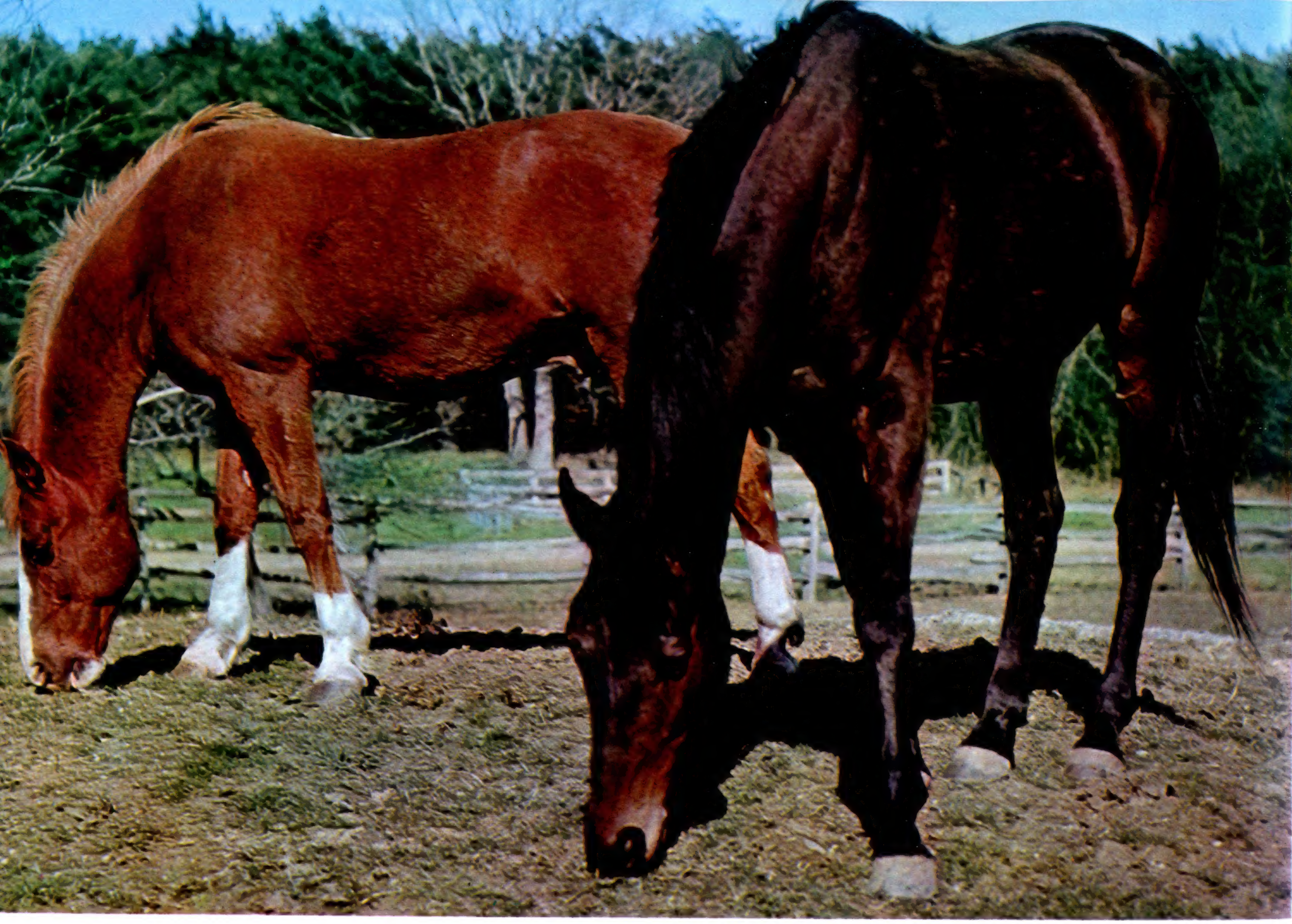
ウマのからだの名称。
ウマの体形や体格の特徴をあらわすことばには
〈ウマの審査〉用語が多い。
長い頭，短い背，肉づきのよい肢などという。（下右）

イラスト　木村しゅうじ





放し飼いのウマ。
ウマ科の動物は，群れをなして生活する
草食動物である。
群れは雄のリーダーの指揮で草地を移動する。
リーダーは権力と地位の保持につとめる。
PH. HOLMES-LEBEL （上）*PH. PRENZEL-PRESS* （下）





あてる。若いうちは6本の門歯が弧を描いたように並んでいるが，やがて年齢とともに弧の半径はひろがり，成熟すると横にほぼ一列に並んでくる。これに歯の表面の摩滅のしかたと，乳歯の抜けかわりを加えて年齢をおしはかるのである。

ウマの門歯は絶えず成長しているから，摩滅による表面の模様も年齢に応じて変わってくる。ごく若い，すり減っていない時分には，咀嚼面にみえる象牙質に浅いくぼみがあって，ここにセメント質がいっぱいにつまっている。それが削りとられていくと，歯坎（しかん）というくぼみをつくり，黒窩（こくか）という黒色の部分がくぼみのなかにみられるようになる。わかりやすく門歯と年齢の関係を箇条書きにしてみると次のようだ。

幼年期の門歯：中央のエナメル質に囲まれたくぼみに，セメント質がつまっている。

壮年期の門歯：中央のくぼみは，逆円錐形に歯のなかにはいりこんでいるから，年をとるほどくぼみの直径が小さくなっていく。

老年期の門歯：摩滅によって，セメント質

ウマ科の動物は，1本の肢に1本の指しかない。
それは中指である。
肢の先は角質のひづめで保護されている。（上）
PH. HOLMES-LEBEL

ウマの駈歩。
すなわちギャロップは
ウマ科の動物だけがする独特な歩法である。
跳躍の連続するこの走り方が
ウマを，躍動する動物に仕立てあげている。（下）
PH. SITENSKY-ATLAS-PHOTO

がつまっていたくぼみがなくなっている。

草を食べるための盲腸

ウマ科の動物は草食である。そのために，草のよくおい茂った平原にすみ，大量の草を食べなければならない。栄養価の乏しい草を利用するためには，極端に長い消化器官の助けをかりることになる。

肉食動物では盲腸はごく小さいが，草食動物ではたいへん大きく，このなかに食べたものをたくわえるしくみになっている。盲腸には無数のバクテリアと原虫類からなる腸内細菌叢がつくられていて，食べた草のセルローズを完全に消化する，いわば二次的な消化を行なっている。

ウマの歩法の1つギャロップ

ウマ科の動物は，ギャロップという特別な歩法をもっている。跳躍を連続したようなこの歩法には，いくつかの異なった肢（あし）の運び方があるが，ふつう3または4調歩のギャロップである。たとえば，4調歩のギャロップは，肢の踏み方によって，次の8つの歩期に分解して説明することができる。

第1歩期：右後肢（こうし）が地面につき，他の3肢が地面を離れている。

第2歩期：左後肢が着地し，両方の前肢は地面から離れている。

第3歩期：体重が前方にかかる。右前肢が着地し，右後肢が地面を離れる。

第4歩期：右前肢をささえにして，からだが前進している。他の3肢は地面を離れ，前方に進んでいる。

第5歩期：体重は前方に移動している。左前肢が着地し，両方の後肢だけが地面を離れている。

第6歩期：右前肢が地面を離れる。右前肢にかわって左前肢が体重をささえ，他の3肢は地面を離れている。

第7歩期：左前肢が上がり，四肢（しし）は屈曲してまったく地面から離れ，からだは空中に浮いている。

第8歩期：右後肢が地面につき，再び同じ順序で歩期が繰り返される。

この歩法は一種の跳躍運動で，第7歩期にはからだ全体がまったく空中に浮いているわけだが，とりわけ高く跳びあがるわけではなく，からだは同じ高さのままで，四肢のひざを折り曲げて地面を離れているのである。

立って眠っても疲れない構造

ウマ科の動物は立ったまま眠り，立ったままで休息することができる。立ったままでいても疲れないのは，靭帯（じんたい）の働きによるためである。大腿（だいたい）骨と下腿（かたい）骨と膝蓋（しつがい）骨の関節を動かないように固定し，筋肉の収縮によるエネルギー消費をしないで，経済的に体重をささえることのできる独特のつくりによるのである。

また，頸（くび）に付着し，頸椎（けいつい）に沿って走っているよく発達した項（こう）靭帯があって，それが頭をしっかりと水平にささえているが，この構造がなければ，頭を前に突きだしたふつうの姿勢でさえ，疲労の原因となり，むだなエネルギーを消費することになる。

ウマ科の動物の繁殖力は，強いとはいえない。雌は1度に1頭しか子を生まない。季節と種類によって多少の差があるが，発情の周期は，およそ22日であり，発情の持続は3～5日である。妊娠期間は，ウマで11か月，ロバは12か月，シマウマは13か月である。

ウマ科に属する動物のあいだで，種類の違ったもの，たとえばウマとロバとを交配して雑種をつくることはできるが，生まれた雑種は一般に子をつくる能力がない。とくに雑種が雄の場合には，子はできない。雑種の雌が，両親の一方の種類に属する雄と交配して受胎したという例は報告されている。



ウマの親子。
ウマ科の動物の繁殖力は弱いといってよい。
妊娠期間は1年内外で1頭の子しか
生まないからである。春に生まれるのが多く
その場合の乳離れは秋になる。（上）
PH. J. BURTON



草を食べるウマ。
ウマ科の動物の食べ物は草である。
そのため草をよく消化しやすくする
大きく長い腸をしている。
家畜になっているウマの食性は複雑である。（下）
PH. H. DITTMER, G. BERN



ウマ属　*Equus*

ウマ科にはただ1つの属，すなわちウマ属があるだけである。ウマ，ロバ，シマウマがこの属にはいる。野生のウマ属は，アフリカ，中央アジア，東アジアなどに生息する。〔注2〕

ウマ　*Equus caballus*

ウマ属のなかでも，ウマは縞模様のない被毛によってシマウマと区別され，また形態学上のさまざまな特徴によってロバと区別されている。

ロバとの違いは，ウマのひづめはほぼ円筒形だが，ロバのひづめは細長く，蹄叉（ていさ）が大きい。ウマには前肢（ぜんし）にも後肢にも附蟬（ふぜん）があるが，ロバでは前肢にしかない。ウマの耳は短く，尾には長い尾毛がはえているが，ロバの耳は大きくて長く，尾の先にひとふさの長毛がはえているだけで，尾のつけ根から尾全体にはえる尾毛はない。ウマの頭蓋（ずがい）骨容積はロバよりはるかに大きい。

人間は太古のむかしから，ウマを飼いならして家畜としてきたが，今でも中央アジアやモンゴルの草原には，少数ながら野生のウマが生息し，また半野生の馬群も，アジア，アフリカ，アメリカの各地に見られる。〔注3〕

タルパン　家畜種
元来のタルパンは
ロシアや中央アジアの草原に野生していた。
その子孫はポーランド，モンゴル，ゴビ砂漠
周辺で飼われている。（上）
PH. INTERPRESS IMAGES ET TEXTES



タルパンの横顔。家畜種
中型の，抵抗力のきわめて強い未改良馬である。
被毛は長く，毛深くて
やや重い頭はヒツジの頭に似ている。（下）
PH. H. HELMQAL

タルパン　*Equus caballus gmelini*

タルパンは，家畜化されているウマの祖先の1つと考えられている。むかしは南ロシアおよび西アジアの草原地帯に広く分布していたが，野生のタルパンは狩猟の対象となってとりつくされ，1760年ごろには絶滅してしまった。

元来のタルパンはすでにいないわけで，現在タルパンといわれているウマは，タルパンの直系の子孫で家畜化されているポーランドのコニク（Konik）であり，また，現在残っているただ1つの野生のウマ，プルツェワルスキーウマとコニクとの交雑によってできたものが，タルパンという名で呼ばれている。

現在のタルパンは，フランスのカマルグ馬や日本の都井岬（宮崎県）のウマと同じように，モンゴルの草原地帯やゴビ砂漠周辺，黄河の上流沿いに放し飼いにされている。

大きさは，さほど大きくはない。しかも一







見ひ弱そうだが、たいへん抵抗力が強く、そまつな食糧にもよく耐える。頭は比較的大きく、鼻梁（びりょう）がやや出っ張り、耳はいくぶん長く、頸（くび）は太くて短い。背は長く、尻が傾斜していて肢（あし）は細い。被毛はやや長く、密生している。北極地方にすむ動物のように、夏の被毛は黄褐色だが、冬毛にかわると、全体が白色になる。繁殖力は強くて、毎年1頭の子を生む。

高山地帯の環境に対してよく適応し、海抜6000メートルもの、ヤクのほかには訪れる動物もないような山地で、ひづめで雪を掘りながら、草を食べているタルパンの群れを見かけることがある。

遠いむかし、タルパンはモンゴル人に飼いならされたわけだが、タルパンの本能ともいえる癇の強さと忍耐力とが、温和な牧畜民族を好戦的な放浪の騎馬民族にかえ、征服と掠奪をほしいままにさせたのである。その精悍さは、現代のタルパンにも残っている。

プルツェワルスキーウマ

Equus caballus przewalskii

プルツェワルスキーウマ（モウコノウマ）は、現在生き残っているただ1つの野生のウマである。1879年、ロシアの陸軍士官プルツェワルスキーによって、アルタイ山脈の南方、ズンガリア地方で発見された。かれはこのウマにプルツェワルスキーウマと自分の名をつけ、その子ウマの毛皮を持ち帰った。1881年、ロシアの動物学者ポリヤコフ（Poliakoff）が、このウマに関する論文を発表し、ヨーロッパの動物園に現物がきたのは1899年であった。

頭はやや短くて重く、頸は幅が広く、頸の方向は水平に近い。また、たてがみが頸の両わきにたれていないで、立っているのが特徴である。毛の色は河原毛で、四肢（しし）と尾、たてがみは黒く、腹部はやや白っぽく、鼻梁（びりょう）もまた色が薄い。冬毛は長

プルツェワルスキーウマ。
からだの色は河原毛である。腹部はやや淡いが
四肢は黒く、鼻先は白っぽい。
被毛の色は冬になると濃くなる。
体高は135センチ余りである。（上左）
PH. BUZZINI

プルツェワルスキーウマ。
現存する唯一の野生のウマである。
最後の野生ウマも、もう100頭もいないという。
モンゴルのアルタイ山脈地帯に
数頭ずつの群れをつくって生活している。（上右）
PH. B. MALLET-JACANA

プルツェワルスキーウマ。
頭部はやや短く、幅が広い。頸は分厚くて短く
水平に近い形で胴についている。
たてがみは立っており
頸側にたれないのが特徴。（下）
PH. TRENZEL-PRESS





くて色が濃く、頸（くび）の下側の毛が長くのび、下あごにひげのような長い毛がはえてくるのも独特である。換毛は長い冬が終わって、春にはいるころから始まる。食物の不足する冬の間にすっかりやせ細り、なんとなくいらいらしながらも、ウマたちはおたがいに、抜けかわっていくよごれた冬毛のふさを除きあうのである。

尾とたてがみは、被毛と違ったかたい長毛で、抜けかわることはないが、長毛にまじって、季節により抜けかわる短毛がはえている。

プルツェワルスキーウマは、大昔にはヨーロッパ全土、とりわけフランスを中心とする中部ヨーロッパに多かった。フランスのドルドーニュ地方の洞窟の壁には、先史時代に描かれたウマの絵や彫刻が残っているが、ぴんと立ったたてがみ、黒い四肢（しし）、わずかに鼻梁（びりょう）のふくれた横顔、下あごにはえたひげのような毛と、プルツェワルスキーウマの冬毛の特徴をよく表わしている。

また、フランスのソリュトレの遺跡からはプルツェワルスキーウマと認定できる骨が、他のウマの骨にまざって発掘されている。

この時代には、プルツェワルスキーウマと、現在の家ウマの祖先となった別のウマとがおり、ウマの家畜化が始まったころから、プルツェワルスキーウマと交雑して、やがて形や大きさや毛色の違った、いろいろな品種に分かれていったのである。

地球上に100頭余り

プルツェワルスキーウマの現在の生存数は世界各国の動物園に飼育されているものが約60頭、アルタイ山脈一帯に野生しているものが数十頭以内と推定されている。野生のものは、数頭から10数頭の群れをつくって絶えず移動し、たいへん臆病である。

現在飼育されているものは、1902年にドイツのハンブルク動物園長、ハーゲンベックによって捕獲され、ヨーロッパ各地の動物園に分けられた54頭の血を引いている。以後その数がほとんどふえていないのは、囲いの中の生活が、相手を選ぶ性行動の自由を奪い、受胎率を低くし、また環境に対する不安感が流産や死産を高めているためである。

プルツェワルスキーウマの飼育とともに、ここ70年ほどさまざまな研究がされてきた。形態学のうえでは、鼻梁の幅がやや広くなり、歯が長くなった、という変化がみえている。

性的な成熟は、野生下では4歳、飼育下では2歳ごろである。妊娠（にんしん）期間はほぼ11か月。動物園では30年ほど生きるが、野生の状態ではもっと長いようである。

ノルウェーのポニー。
このウマは，直立したたてがみ
河原毛の被毛，幅広く短い頭，白い鼻先など
プルツェフルスキーウマの特徴がよく出ている。
ポニーとは体高148センチ以下のウマをいう。（上）
PH. Z. F. A. RAPHO

プルツェワルスキーウマ。
かつてヨーロッパ全土に広く分布していた。
フランスやスペインの先史時代の洞窟遺跡の壁に
このウマの特徴をよく表わした
壁画が見られる。（下）
PH. PRENZEL-PRESS

サラブレッド。
緊迫の呼吸，流れるような躍動の姿態。
えりすぐられ，競馬のためにつくられた
ウマのなかのエリートである。
3歳から6歳までを勝敗にかける。（右）
撮影　朝日新聞社出版写真部











家ウマ

Equus caballus caballus

現在生息しているウマは，野生のプルツェワルスキーウマを除けば，すべてここに分類される。家畜化されているウマというわけである。日本の宮崎の都井岬のウマや，フランス南部のカマルグ地方のウマのように半野生の生活をしているのもいるが，これもすべて家ウマである。タルパンについては，野生みが強いということで，野生馬として述べた。

家ウマの飼育史

フランスの動物学者ビュフォンは，ウマを《人間が征服した，もっとも高貴な動物》と呼んだ。人間にとって有用であり，しかも人間との心の交流ができ，美しい姿をした動物。家畜化できた人間の英知を誇ってもよい。

現在のウマは，鮮新世〔100～1200万年前〕にアフリカ，アジア，北アメリカの各大陸に分布していたヒッパリオン（*Hipparion*）やプリオヒップス（*Pliohippus*）の子孫である。10万年前には，ほぼその進化を完了して，現在のロバほどの大きさになっていた。

ウマと人間との最初の結びつきは，やはり狩猟の対象としてであろう。旧石器時代の遺跡であるフランスのラスコーや，スペインのアルタミラにある洞窟の壁画などにウマの姿が見られる。ウマが人間の生活の重要な資源となり，家畜化していったのは新石器時代にはいってからだと思われる。

中央アジアとモンゴルの草原地帯に，膨大な数にのぼるウマの群れが飼育されていた遺跡が発見されたが，それはこの地方の遊牧民たちの生活が，ウマと密接に結びついていたことを物語っている。

中国では，ウマは青銅器時代以前から知られていた。古代中国最古の帝王といわれる伏羲の時代（紀元前3500年ごろ）にも登場し，仰韶文化期（紀元前2000年ごろ）には4頭立て，轅つきの二輪馬車が使われた形跡がある。紀元前10世紀ごろには，王の厩舎にモンゴルから輸入した何千頭ものウマがつながれていたという。胴体が樽のようにまるく，小さなひづめのついた長い四肢（しし）をもった，タルパンによく似た小型のウマであったようだ。

インドでは，ベーダ〔バラモン教の聖典〕のなかに紀元前2000年ごろのウマに関する記述があり，そこではウマを神秘な動物としてうたいあげている。

アラビア地方では，新石器時代を過ぎたころにウマがいたことが知られているが，そのウマは絶滅し，紀元前1800年ごろ，アジア系の民族であるヒクソス人の侵入によって，アジアのウマが持ちこまれたのである。

エジプトに移入したのも，やはりヒクソス人によってであった。紀元前1300年ごろ，エジプト王ラメス2世は，ヒッタイト人との戦争に3500台の馬車を使ったという。またこのころ首都のメンフィスやテーベの町には，種馬があらわれており，この種馬からバルブやアラブなどのすぐれた品種がつくられることになった。

ペルシャでは，ウマは重要な役割を果たしてきた。駅伝制度はアケメネス朝（紀元前550～330年）のキュロス王がつくったものであり，またパルティア王国（紀元前250～紀元226年）の人びとは，日常生活のほとんどをウマの背で過ごした。かれらはウマに乗ることが巧みで，たづなも鞍もつけない裸馬にまたがり，足だけでウマを自由にあやつったという。

古代ギリシャ人は，自国産のウマをもたなかったが，エジプトから輸入した。ウマはたちまち神話のなかにも取り入れられ，ギリシャでもっとも美しいウマは，半人半馬のケンタウロスを守護神とするテッサリアの町にいたといわれた。第1回オリンピックは紀元前776年だが，当時のオリンピックには，ウマが引く戦車競走があった。

紀元前4世紀末のアテネの文筆家クセノフォンは，馬術に関する2つの論文『馬術について』と『騎兵隊長』とを書いている。また当時は，戦車隊の規模は著しく大きくなり，アレキサンダー大王は東方遠征に7000頭のウマを連れていったという。

紀元前900年ごろイタリアにはいったエトルリア人は，すでに輓馬や乗馬として，また競馬や宗教の儀式にウマを使っていた。また古代ローマ人は，むかしからウマの改良に努力していた。そして宿駅を設け，ウマの乗り継ぎで1日に100キロ以上も旅ができたといわれている。

14世紀ヨーロッパでは騎士制度の発達で大軍馬（great horse）が出現した。騎士もウマも重い甲冑をつけていたから，戦闘のとき以外にはウマには乗らないことになっていた。

アラビア馬は，隔絶した砂漠のなかで他品種との交雑をまぬがれ，高い純血度を保ちながら繁殖していた。これがヨーロッパに大量に持ちこまれたのは，11世紀以後の十字軍によってである。

世界各地で古くから，ウマは人間の仕事を分担するようになっていた。それにつれて，その姿も，人を乗せ，車を引き，荷を背負うといった目的に合わせて，それぞれ特徴のある体型につくりあげられていったのである。

種馬育成場の馬房。
設備の整った厩舎には
選びぬかれた品種の種馬が集められており
周到な管理の下に飼育され
厳重な選抜で絶えず改良されている。（40—10,11）
PH. Z. E. A.-RAPHO

ヨーロッパやアメリカでは
馬術や，遠乗りを楽しむ人がふえている。
自動車にあきたらなくなった人たちが
自分のウマをもち，乗馬のファッションをつくる。
人間の生活の歴史を知っている人たちだ。（左）
PH. ALMASY

サラブレッド。
エプソン（イギリス）のトレーニングセンター
世界的な競走馬をつくりだす
センターの朝の調教風景。
ウマと人が，その風景にとけ合っている。（上）
撮影　今井寿恵



からだの特徴

前額から鼻梁（びりょう）にかけた横顔の線をみると，3つの型がある。アラブのようにまっすぐなもの，モウコ馬やバルブのように，やや突きでたもの，アルデンナーのようにいくらかへこんだものなどである。頸（くび）と胴の間にははっきりとした境めがなく，頸は胴に45度余りの角度でついている。

背の基礎となっている骨格は椎骨（ついこつ）と肋骨（ろっこつ）である。背や腰は，人や荷の重さをささえるところで，筋肉がつきすぎても，やせすぎてもいけない。〔注4〕

広く，深く，長い胸は，じょうぶな心臓と強力な肺をもっているしるしである。腹の形は，草腹といってふくらみすぎても，また巻腹といってほっそりしすぎていてもいけない。膁腹は短く，よく締まっているのがよい。尾は力強くて，やや高くついているのがよい。

長くて傾斜した肩は，すぐれた歩行能力をもつしるしであり，前肢（ぜんし）は，歩行時の推進器とブレーキの両方の役割を果たすので，肉づきがよくて力強く，垂直でなければならない。

ひざは，人間でいえば手首に当たるわけだが，大きくて，輪郭がはっきりしていて，骨組みがよくわかるようなものでなければならない。球節はまるくて大きく，繋（つなぎ）は前肢が60度，後肢で65度に傾斜しているのがよい。ちゃんと立ったときに，ひづめとひづめとの間は広すぎても狭すぎてもいけない。

後肢の大腿（だいたい）は乗馬で長く，輓馬では内股が張っていて肉づきがよく，がんじょうな膝関節によって筋肉質の下腿（かたい）につながっている。腱（けん）は太くなめらかで，幅の広い飛節（ひせつ）についている。飛節から下は垂直で，尻の先端からまっすぐおろした線と一致するのがよい。

アングロアラブ，
アラブ，サラブレッドとともに純血種である。
毛色は栗毛，肢の白斑はソックス型で
前額から鼻梁にのびる
鼻梁の白い斑紋は流星という。
PH. E. ROSSEAU

毛色の名まえ

ウマの被毛について，その色，あるいは模様には特別な名まえがついている。ごく一般的なものをあげてみよう。

額にある白斑を星と呼び，それが鼻のほうにのびて，額から鼻梁（びりょう）に細い白い流れがあるときは流星と呼ぶ。鼻孔と上くちびるの間にある白斑は鼻端白という。頸すじから背，ときには尾のつけ根までのびた黒い帯のような縞は鰻線。四肢（しし）の先端にある白斑は，大きさによりソックス，ブーツ，ストッキングなどと呼ぶ。

毛色でいうときは，たんにからだの色だけでなく，たてがみ，尾，肢（あし）の下部の色合いも含めて特別な呼び方をする。

栗毛は，黄金色から赤褐色まであり，尾，肢の下部がいくぶん色が濃い。全体の色合いにより栃栗毛，金栗毛，尾花栗毛などと呼ぶ。

プードルという名の特別な白斑である。
鼻づらとくちびるに色素のない部分があって
血の色が皮膚を通して
桃色の斑を浮きださせている。（右ページ左下）
PH. PRENZEL-PRESS

鹿毛は明るい金色から褐色までで、全体が赤みがかっているが、たてがみ、尾、肢の下部は黒である。全体に黒っぽいのを黒鹿毛。

河原毛はクリーム色から亜麻色までの黄色っぽいもので、たてがみと尾は、黒、褐色、黄、赤などである。背に鰻線がある。

葦毛は青っぽい灰色から明るい銀色までで、全体に白と黒の毛のまざり合いである。生まれたときはまっ黒で、年をとるにつれて白くなってくる。

糟毛は白い毛に黄や褐色の毛がまじっていて、全体がひとつの色にみえる。黒糟毛、赤糟毛、青糟毛などがある。

青毛は全体がまっ黒で、明るい部分のないもの。口や膁腹などの明るいのをブラウン。

また、毛色を特徴にしてつくりあげた品種があり、この場合は品種の名が毛色を表わす。

パロミノ（**Palomino**）は、からだは金色から銅色までの黄色みがかった色合いで、たてがみと尾が白い、いわゆる尾花栗毛。

アパルーサ（**Appaloosa**）は、白や褐色の被毛に、黒や黒褐色の斑点がある。斑点の模様によって、いくつかに呼びわけられる。

ピント（**Pinto**）は、白地の上に大きな斑点があざやかな模様を描いているもの。


1


2


3


4




5


6

1　葦毛またはホワイト　*PH. LA COLOTHEQUE*
2　ぶち毛またはピント　*PH. OKAPIA*
3　鹿毛　*PH. AARONS*
4　連銭のみえる葦毛　*PH. COLVANN*
5　黒鹿毛　*PH. BUZZINI*
6　栗毛　*PH. LAUROS*



歩法

ウマは，走る速さによって常歩，速歩，駈歩という３つの基本的な歩法を使いわける．〔注５〕

常歩（walk）は，４つの歩期に区別できる自然な歩法である。からだの前半分と後半分とが交互に上下し，四肢（しし）のうち３本がいつも地面についている。肢（あし）が地面から離れる順序は，右前肢（ぜんし），左後肢，左前肢，右後肢である。速さは時速６～８キロである。

速歩（trot）と側対歩（pace）とはともに，間に跳躍をはさんだ２つの歩期を繰り返す歩法である。ウマは２つの肢を同時に地面につけて体重をささえ，他の２肢はあげたまま進む。速歩では対角線上の前肢と後肢とを同時にあげ，側対歩では同じ側の前肢と後肢とを同時にあげる。側対歩は，ゾウやラクダではあたりまえの歩法だが，ウマは特別に調教しなければならない。側対歩をするウマをペーサー（pacer）といい，からだが上下しないために繋駕競走用にしたてられる。この歩法での速度は，時速12～18キロである。

駈歩（gallop），いわゆるギャロップで先にくわしく述べたが，ウマのもっとも速い走り方である。３調歩，４調歩の駈歩があるが，常歩や速歩とは違って，空中への跳躍が順々につながったような歩法である。この歩法だと，人間を乗せたままで最高速度が，時速60キロ以上というたいへんなスピードで，走ることができる。

常歩は，もっともゆっくりした歩法である。
地面からからだ全体が離れることはなく
つねに３本の肢で体重をささえ
１本の肢だけが地面から離れる
安定した歩き方である。（上左）

PH. B. LOSIER



速歩は，常歩と駈歩の中間のスピードである。
フランスには，速歩による競走があり
この場合の騎手は駈歩競走とはまったく違った
騎馬姿勢をとる。（上右）

PH. P. BERTRAND



駈歩はウマのもっとも速い走り方で
ギャロップともいって時速60キロにもなる。
平場競走での騎手の姿勢は，アメリカスタイルの
あぶみを非常に短くして身をのりだした
俗にいうモンキー乗りである。（下）

PH. P. BERTRAND





馬　術

馬術(equitation または horsemanship)あるいは乗馬法は、人間がウマに乗り始めて以来、何世紀もの間の経験や試行を積み重ねた結果、ようやく1つの技術の体系を整えるようになった。

馬術は、オリンピックに戦車競走を取り入れたギリシャ時代から、しだいに理屈にかなった技術に成長した。たづなと鞍の発明で騎兵が生まれ、中世の騎士は馬上で長い槍や剣を使いこなした。やがて騎兵隊がつくりあげられ、ウマと人間とが一体になった新しい武器として、戦闘の中心になった。

火薬と銃砲の発明は、騎兵を戦闘の主役から引きおろしたが、ウマの改良は続けられてスポーツや狩猟に適する、軽快で速力の速いものをつくる努力がされた。

乗馬学校は、16世紀にイタリアのフェラーラとナポリに創設されたのが最初で、ヨーロッパ全土から騎士を集めた。その後各国に乗馬学校ができたが、フランスのソーミュールとオーストリアのウィーンの乗馬学校は、今日もなお存続し、技術の高さを誇っている。

ウマの頸(くび)は、たんなる飾りやかぶとをつけるところではなくなり、頭はおもりに、頸はてこにみたてられ、このおもりを上下することによって重心を前方、後方に移動させると考えられるようになった。たづなさばきや、騎士が体重を左右に傾けることや、両脚で方向転換やスピードをあげるなど、科学的な説明を加えた近代馬術となっていった。



ソーミュール乗馬学校
ここの馬術教官たちは
世界でもっとも優秀な騎手である
このページの3点の写真はいずれも
約乗という乗馬の動きである

約乗のなかの1つの動作である
[illegible]への横歩[illegible]のひとこまで
からだを正面に向けたまま
右斜め前に進む方法である　上左
PH. DOISNEAU RAPHO

[illegible]て、飛節をのばしてまっすぐ
たちあがる　前からの敵に向かうもの　上右
[illegible]て、[illegible]の次の動作
前肢をつくなり後ろの敵を蹴るもの
PH. PAVLOVSKY RAPHO
PH. DOISNEAU RAPHO







競　馬

競馬（horse racing）は、日本だけでなく本場のヨーロッパはもちろん、ソ連なども加えた世界の国々で熱狂的に迎えられている。しかし、繋駕や騎乗によるウマの競争の歴史は、遠く古代から大衆の人気をひきつけており、今に始まったことではない。古代ローマやビザンチン帝国では、勝負の結果から群衆がなぐり合いを始め、流血の惨事にいたったという記録がある。

中世には、フランク王国のシャルル大帝の指揮下で競馬が行なわれている。12世紀の騎士小説『エーモンの4人の息子』には《競馬に勝って400マルクの賞金をせしめた》というくだりがある。しかし、中世の騎士たちにとって、競馬はスポーツや娯楽ではなく、むしろ決闘の1つの方法という性格が強かったようである。

ヨーロッパではじめて定期的な競馬を考えだし、これに金貨40ポンドの賞金をつけたのはイギリスのリチャード1世〔獅子王、12世紀末〕であった。そしてアラビア馬を大量に輸入したのもかれである。

16世紀になると、イギリスで野外横断競走が行なわれるようになったが、これが現在の障害レースの起源となった。

イギリスのニューマーケットに最初の競馬場をつくり、馬場で競走するように規定したのはジェームズ1世で、17世紀はじめのことだった。サラブレッドの血統や競走成績を記録する、公式の登録簿（general stud book）をつくったのはイギリスのウィリアム3世で、17世紀末だった。

最初の競馬クラブは、1750年にイギリスにできた。フランスでは1833年に競馬クラブができ、同時にウマの血統台帳とその登録機関もできあがった。

日本で西洋式の競馬が行なわれたのは、慶応元年、横浜の根岸競馬であった。古来くらべ馬の神事で、藤原時代、鎌倉時代には、随身たちが技を競った競馬があった。

現代の競馬は、走る距離、出走馬の年齢、馬場の形式〔平地または障害〕などによって競技は多くの種類に分けられている。そのウマは大部分サラブレッドである。

競馬は駈歩競走だが、1836年以来、速歩競走も行なわれている。これには、駈歩をしないように訓練されたウマを使っている。

競馬は、世界じゅうでみられる競技である。
この競技が、ウマの品種改良にあげた功績は
きわめて大きい。
そこから生みだされたものが
サラブレッドである。（上）
PH. DAUTREPPE-ATLAS PHOTO

障害競走、あるいは野外横断競走。
この競走の起こりは、垣や堀、川を飛び越え
村から村へと野原を競走したそぼくな競技だった。
現在の障害競走は、設備した障害物とルールとで
競馬場で争われている。（中）
PH. F. MAYER-MAGNUM

繋駕競走。
サルキーと呼ぶ1人乗り二輪馬車を引く競走。
フランス、アメリカ合衆国、ソ連などで
人気のあるスポーツである。
トロッター、ペーサーなど特別なウマを使う。（下）
PH. P. BETRAND

馬術競技

馬術競技（equestrian game）は，元来は障害物を飛び越える競技で，19世紀の終わりに始まったものである。4歳馬の競技，6～12歳馬の競技などの年齢別競技，年齢や品種に制限のない無差別競技など，各国の競技団体がさまざまな規則をつくっているが，どの場合でも，1.4メートル以上の高さの障害物を6～8個，狭い馬場に並べて飛び越させる。競技は，一般に個人または団体の対抗で行なわれる。

障害物の形式にはいろいろあるが，次の3つの種類に分けられる。《高さの飛越》は，柵や壁などの垂直な障害物，《幅の飛越》は，濠や平行に並べた横木などを用い，《高さと幅の飛越》では，土手や斜面をつくったり，水をたたえた濠や3段に並べた横木の勾配を加減して，高さと幅を同時に出せるようにする，などである。

《総合馬術競技》は，1921年にストックホルムのオリンピック大会ではじめて行なわれた。この競技は，同じ乗馬と騎手とが，3日間に，調教競技，障害物が配置してある野外の長距離競技，馬場の障害競技の3種目を，連続して行なうものである。この競技に優勝することは，馬術家にとっての最高の栄誉であるといえる。

ポ　ロ

ポロ（polo）とは，ヤクの皮でつくったボールを意味するチベット語のプル（pulu）からきているという。この競技は，アジアでは紀元前から行なわれていて，インドを植民地としたイギリス人が，18世紀末にヨーロッパに紹介したものである。現在インドネシアでも，ポロに似た競技が行なわれている。

ポロの競技場は，縦275メートル，横140メートルで，試合時間は7分30秒ずつ8ピリオドに分かれ，1時間続くが，6ピリオドの試合もある。

1チームは前衛2人，中衛1人，後衛1人の4選手からなり，マレットというT字形の槌で木製の球を打ち，相手方のゴール（幅7.45メートル，高さ3.1メートル）に打ちこむと得点になる。

元来，ポロは小型のウマであるポニーを使っており，現在でも，体高148センチ以下に決められている。このウマは，競走用と違って，出走と同時に高速を出すことが要求される。そのうえ選手の激しい重心の移動にも耐え，ときにマレットで打たれても平静さを失わない沈着さもあわせて要求される。



馬術競技
乗馬と騎手の《人馬一体》の妙技が
勝敗を決めるカギになる。
両者の呼吸がぴったり合うようになるまでには
長い間の訓練を経なければならない。（上）
PH. P. BERTRAND





ポロ（中左）とブズカシ（中右）
ポロはマ[illegible]で木製の[illegible]ルをたたいて
得点をきそう競技である。
[illegible]カシはア[illegible]ニスタンで[illegible]なわれていて
砂をつめた[illegible]ルをウマの[illegible]で[illegible]あう競技
PH. P. BERTRAND（中左） PH. K. ET S. MICHAUD（中右）



競技用のウマの調教
まずはじめは，乗らずに，たづなだけでならす[illegible]
調教者[illegible]長いひもをもち，[illegible]
[illegible]
[illegible]広い馬場での運動にならすことである。（下）
PH. P. BERTRAND



種馬牧場

かつてウマの飼育は、経験だけをたよりに行なっていたが、やがて国家が管理し、計画的に改良と繁殖が行なわれる特殊な産業へと成長した。ウマと軍事目的は切り離せなかったから、ウマをよくすることが軍隊を強くすることでもあったわけで、またそれだけに外国に対して秘密の多いところであった。イヌなどは世界的な組織もあるが、ウマの場合は、以上のような理由で、今もってなかなか国際的機関が生まれにくいような状態である。

フランスでは国立の種馬牧場ができたのは1665年で、うちつづく戦争で消耗してしまった騎兵用軍馬を補充し、あわせて無計画な繁殖を防ぐためであった。この種馬牧場はフランス革命によって閉鎖されたが、1806年にナポレオン皇帝が再興し、その後、種馬牧場の制度は現在まで続いている。

ここでは、品種の改良、生産の指導、種馬の購入、衛生管理、血統書の作成、血統台帳の管理、飼育者への助成金の給付、競馬の振興など、ウマに関するさまざまな仕事を行なっている。

日本の場合、第二次大戦後は国立の種馬牧場はなく、現在の競走馬の育成や繁殖は、日本中央競馬会の牧場や民間の牧場で行なっている。



種馬牧場。
美しい自然の環境のなかで
おもに競馬に用いるサラブレッドはつくられる。
観衆のどよめくなかに登場する日を
ウマも思い描いているのだろうか。(上)
PH. B. GOURI

機械文明は、ウマが果たしてきた役割の多くを
奪いとってしまった。
生活の奥深くにはいりこんでいたウマの影も
ずいぶん薄れてしまったが
何千年来のつながりは簡単には消えない。(下)
PH. CAMERA PRESS HOLMES-LEBEL

日本の種馬所と種馬牧場

野村晋一

古い時代のことはともかく，徳川時代には，各藩が各地に牧場を設けて藩用のウマを飼い，民有のウマは自然の放牧にまかされていた．

明治維新以後，牧場の多くのものは廃止されたり，農地にされたりして消滅し，残ったものもほとんどが放し飼いの自然放牧で，格別の改良は加えられなかった．

ウマの改良を目的とした牧場がつくられたのは1872（明治５）年で，北海道新冠郡七重勧業試験場の開設を手始めとし，1875年には千葉県に取香種畜場，1876年に北海道真駒内種畜場，岩手県に外山，葉水，茨島の３牧場，1880年に北海道新冠牧場など，あいついで開設された．

この間に，民間でも1872年に青森県に広沢牧場，その後，園田，小岩井などの牧場が設立されることになったが，1881年の統計では，牧場のある県が２府26県，6000頭のウマが飼養されていた．

隆盛だった軍馬の時代

しかし，本格的な牧場ができて，ウマの計画的な生産が始まったのは，日清戦争後の1896（明治29）年に種馬牧場および種馬所官制がしかれてからのことで，奥羽，九州の２種馬牧場，岩手，宮城，熊本の３種馬所が，最初の国営の機関として活動することになった．

1906（明治39）年，日露戦争の経験から，内閣直属の馬政局が置かれて，日高，十勝の２種馬牧場，長野のほかに５種馬所がその監督下にはいり，さらに県立，民有の牧場が加わって馬産は大いに振興し，1941（昭和16）年には実に100万頭の軍用適格馬が全国にくまなく飼養されていた．

戦後はもっぱら競走馬

しかし，終戦後は国営の種馬牧場，種馬所はことごとくウマの飼養を放棄し，ウシ，ブタ，ヤギ，ヒツジなどの家畜の改良繁殖に専念することとなり，ウマに関する改良・生産はまったく政府の手を離れて民間の事業となった．

現在では農業用馬の生産のための中央団体として日本馬事協会，競走馬の生産のための日本軽種馬協会，軽種馬登録協会，競馬の施行のための日本中央競馬会，地方競馬全国協会などがあって，ウマの生産，利用に関するいっさいの業務を行なっている．■

ウマの進化

哺乳動物のうち，比較的よく進化の過程が究明されているのが，このウマとゾウである．10億年ほど前に，海に生命が生まれてから，今日地球上にすむ哺乳動物の祖先のすべてが，この世に現われたのは，新世代〔約7000万年前より〕にはいってからで，暁（あかつき）の馬（dawn horse）と呼ばれるウマの祖先エオヒップス *Eohippus* が北アメリカ大陸に，ヒラコテリウム *Hyracotherium* がヨーロッパ大陸に現われたのもこのころである．

この２つのウマの祖先は，上あごに４つの突起のある瘤歯（りゅうし），肢に４指３趾〔前肢の指が４本，後肢の指が３本〕をもつキツネほどの大きさの動物であった．ヒラコテリウムはまもなく絶滅し，エオヒップスのみが，北アメリカ大陸の森林の動物として生き残った．

エオヒップスの子孫は森林を抜けだして草原にすみつき，始新世〔5500万～3800万年前〕の中期にはオロヒップス *Orohippus*，エピヒップス *Epihippus* などが現われ，漸新世〔3800万～2800万年前〕には，コリー犬ほどの大きさになり，３指３趾の動物に変わっていた．

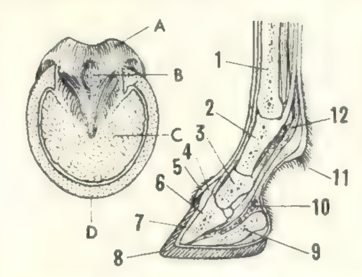
中新世にはメゾヒップス *Mesohippus* から派生したアンキテリウム *Anchitherium* やヒポヒップス *Hipohippus* が，当時陸つづきだったベーリング海峡を渡ってユーラシア大陸にひろがったが，ともに絶滅し，パラヒップス *Parahippus* のみが北アメリカ大陸に生き残り，中新世の前期から中期にわたって繁栄した．

北アメリカに現われた祖先

メリヒップス *Meryhippus* は北アメリカ大陸の中新世の中期と後期の草原の動

カラーページ注

〔注１〕 **ひづめの構造図**　下の図．

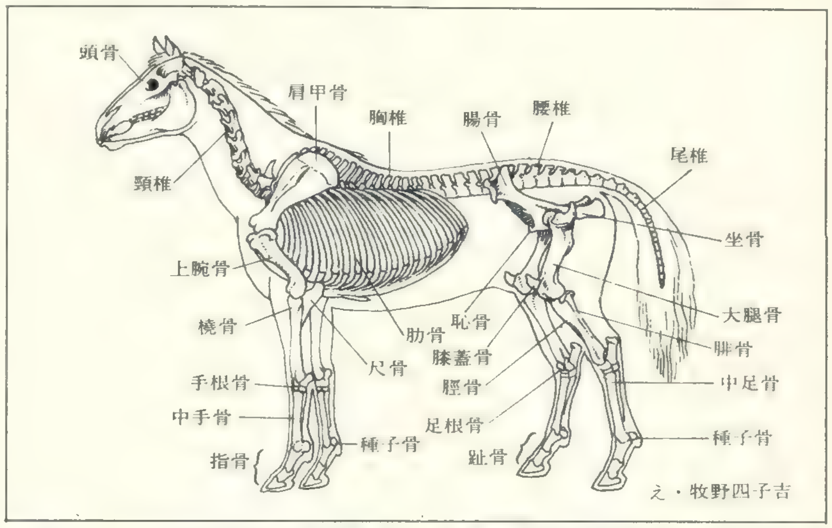


ひづめの裏面		ひづめの縦断面（前肢）	
A	蹄踵	1	中手骨
B	蹄叉	2	繋骨（第１指骨）
C	蹄底	3	冠骨（第２指骨）
D	蹄壁	4	肉冠
		5	蹄冠
		6	蹄骨（第３指骨）
		7	肉葉
		8	蹄壁
		9	蹄叉
		10	せき枕
		11	距毛
		12	深屈腱

〔注２〕 **ウマ属**　ウマ科にはウマ属１つだけがあり，ウマ，ロバ，シマウマの３つに分けられる．現存するウマは，家ウマとプルツェワルスキーウマの２種類であり，前者については200以上の品種がある．

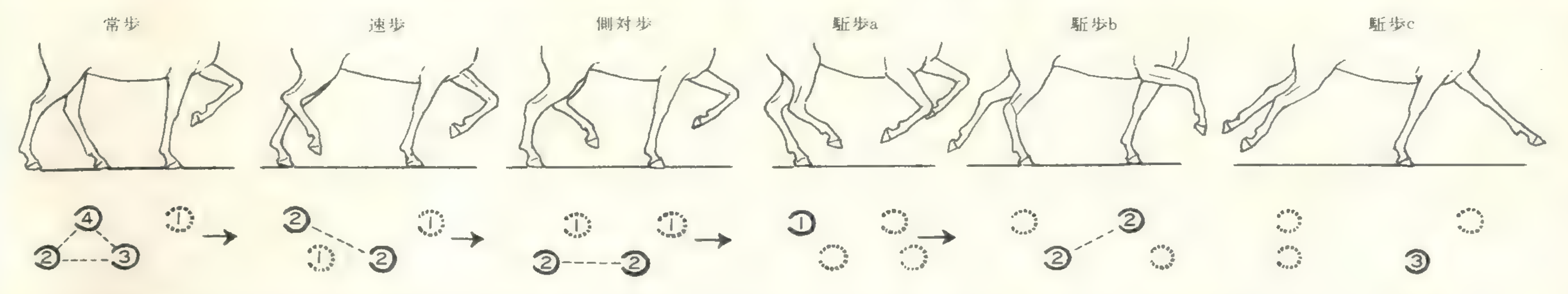
〔注３〕 **野生馬・半野生馬**　現存する野生馬はプルツェワルスキーウマだけで，たかだか数十頭しかいない．アジア，アメリカ，アフリカなどで，一般に野生馬と呼んでいるものは，家ウマが人間の手を離れて山野に生息しているもので，これを半野生のウマとした．

〔注４〕 **ウマの骨格図**　右の図．人間のからだの構造と比較してみると，ひずめがつめであり，指骨，趾骨が指に当たり，中手骨，中足骨は手足の甲の骨である．橈骨（とうこつ）は腕の前膊，脛骨は脚のすねに相当する．上腕骨が上膊，大腿骨がももの部分となる．手根骨，足根骨の部分が，人間の腕（いわゆる手首の部分）とかかととに相当するところである．



〔注５〕 **ウマの基本的な歩法と蹄跡図**　下の図．常歩（なみあし），速歩（はやあし），側対歩，駈歩（かけあし）の肢の着地順と進行方向とを示している．■

（野村晋一）



※蹄跡の実線は着地を示し，破線は離地を示す．※数字は着地の順を示す　※常歩は４つの音が聞こえて１歩（４調歩），速歩は２つの音で１歩（２調歩），駈歩は３つの音で１歩（３調歩）である

ヒグマと2人のイノシシ 38

1人のイノシシに

畑 正憲

ガツン

にぶい音がした。

渾身の力をこめて振りおろした棒は、どんべえの右腕に食いこんだ。

――死ね！

隠さず、正直に書こう。その時の僕の怒りは、どんべえをぶち殺しかねないものだった。手をかけて愛育しておきながら、棒には愛などひとかけらもこめられていなかった。僕のからだの半分ほどの体重を持つ小さな命へ、僕は、死ねとばかりに棒を振りおろしたのだ。

棒が右腕に当たったのがせめてもの幸いだった。

まるでバネ仕掛けの人形。どんべえは真上にとび上がり、それから転げるように家の中に入った。

「逃げるのか」

僕は棒を持ったまま、玄関に仁王立ちになった。

中に入ったどんべえは、2,3歩進んでもんどりを打った。頭から前へ突っこみ、くるりと回転する。

それから急いで走ろうとするが、右手がままならぬ。だらりとし、力が入らない。それでも必死で左手だけで床を掻き、向かって右隅へうずくまってしまった。

僕は興奮していた。

「やってやる，殺してやる」

そう呟きながら玄関の辺りをうろうろしていた。からだ中が空になった感じがして、何も考えられぬ。痛烈な喧嘩の後の空しさが、心の中とは逆の言葉になってゆく。

「こんちくしょう，ぶっ殺すぞ」

その騒ぎを聞きつけ、ウマ小屋からすっとんできた弟が言った。

「見ろ，どんべえが泣いているぞ」

「バカな」

「本当だ。見ろよ，目尻から1センチばかり，黒い涙が垂れている」



「ごめんな，どんべえ」畑さんの声に応じて彼女はおずおずと口を差し出してきた

「嘘だ，信じられぬ」

僕は窓から外を見ていた。どうしてどんべえの涙が見られようか，あっちへゆけ，おれをひとりにさせてくれ。

「本当だよ，兄貴」

「うるさい」

「見た方がいいよ。どんべえの涙を」

弟はそう言って，カメラに手を触れようともせずに，夕暮れ迫る戸外へと出ていった。子ウマが生まれ，島にはまた動物が増え，夕暮れには仕事が多いのである。

窓のすぐ向こうには海がある。夜の気配が青い静けさになり，水鳥が最後の餌をあさっている。

雨もよいの靄。水鳥はおぼろにかすんだシルエット。

ヒグマが泣くなんて，僕は信じられなかった。解剖学的にも，涙腺の存在は否定されている。

どの位経ったろうか。

僕はやっとの思いで後を振り返った。からだを回転させるだけの動作が，数百里歩けと命令されたかのようにしんどかった。

僕は見た。

どんべえを。

部屋の隅。暗がり，そこにいた。

カラーページ解説

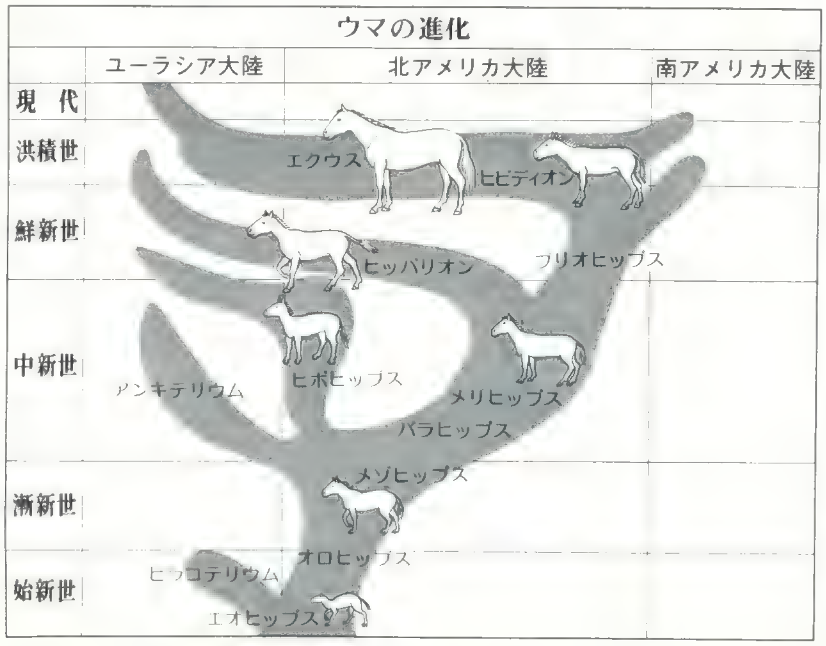
物として大いに栄え、現代のウマの直系の祖先といわれるほどに臼歯の発達した、小さなロバほどの大きさの動物になったが、なお3指3趾であった。

鮮新世（1200万～300万年前）に現われたヒッパリオン *Hipparion* は、ユーラシア大陸に渡り、遠くアフリカ大陸にも分布したが、やがて絶滅した。プリオヒップス *Pliohippus* は北アメリカ大陸の鮮新世前期に現われた3指3趾のロバ大の動物で、体形や歯は現代のウマとほぼ同じであった。プリオヒップスから枝分かれしたヒピディオン *Hippidion* は、現代のウマと同じく、前後肢ともに指が1本であったが、最新世に南アメリカ大陸に移動して絶滅した。

北アメリカ大陸に生き残った1指1趾のエクウス *Equus* は、やがてベーリング陸橋を渡って、アジアからヨーロッパ大陸にひろがり、遠くアフリカまでも分布して、今日200種以上に及ぶ家ウマの祖先となったが、逆にアメリカ大陸からはまったく姿を消してしまった。1492年コロンブスがアメリカ大陸を発見し、スペイン馬を移殖するまでは、この大陸にウマを見ることはできなかった。

現代のウマ科の動物であるウマ、ロバ、シマウマは、アジア、ヨーロッパおよびアフリカに生存したエクウスの子孫たちである。

図は、暁の馬エオヒップスから、現代のウマの祖先エクウスに進化した経過を示したものである。■



ウマの生涯

まだ雪の消えない北海道の牧場に、子を連れた母ウマの姿が見え始める。ウマの出産は4、5月をピークとした春に集中している。

ウマの妊娠期間は11か月で、生まれるとすぐ立ちあがって歩きだす。離乳するのは、生後5、6か月たった秋で、しだいに母親から離れるようになる。そして離乳期をはさんだ何か月かは発育最盛期で、からだの骨組みや内臓器官などが急速に発達する。飼料は、胃が小さいために幾度かに分けて与えられ、くだいたエンバク、フスマ、干し草、切りわら、青草などからなっている。

ウマの年齢は、数え年で数える。春に生まれたウマは、その年は当歳といって1歳であり、正月がくると2歳になる。

中央競馬では、生後、満24か月以上たったウマでないと走れないことになっているから、3歳の6、7月ごろからレースに出ることになる。年々、新しく走るウマ、すなわち新馬の数はふえており、1971年には、東西で2000頭が新馬の登録を受けた。そのときの登録馬の数は全部で約4500頭であった。

3歳はまだおとなになりきっていないので、3歳どうしのレースをする。おとなになるのは4歳で、スピードもでき、多くのレースに出られる。競走馬の最高潮は5歳の秋で、6歳の春から下降線をたどる。大部分は6歳の春に姿を消していく。実績を残したほんの少数のものだけが種馬となる。乗馬が新馬として競技に使われるようになるのは、およそ5歳からである。ウマの寿命は、25～30歳である。■

どんべえがいた。生きているどんべえがいた。

しかし、何という哀れな、変わり果てた姿であろうか。どんべえはからだを最小限に縮めて坐り、その真正面に顔をすえていた。口が床につく位で、逆三角形の子グマの顔だけが、壁にたてかけてある感じがする。

目は伏せ、生気がない。

「どんべ……」

声がつまった。

そして、棒が当たったどんべえの右の腕は、見るも無残にふくれていた。力こぶそっくりのふくらみが出来ている。

「折れたか、骨が。お前を片輪にしたのか……」

爪さえ欠けぬよう注意してきたどんべえを、右手のきかぬ片輪にしたのか。

僕はジャンパーを脱いだ。

「ねえ」

と、妻が僕の手首をつかまえ、

「行かないで。気分が落ち着くまで待ってちょうだい」

「……」

「ここであなたに怪我をされたら、どうなると思うの。ね、出来たことは仕方がないわよ。静かに成ゆきを見守りましょうよ」

「……」

僕は黙っていた。ものを言うと、涙がこぼれそうだったから。

それでも、傷の具合を調べずにはおれなかった。玄関でわめいていたあの数分前までの興奮が残っていたら、鼻位なくなるかもしれぬ。が、それでもいい。むしろその方が気が晴れるだろう。この手でお前を打ちすえたのだから。

僕は妻を振り切ってどんべえの前に坐って言った。

「痛かったか、どんべえ」

答は返ってこない。

「ごめんな、どんべえ」

僕たちの顔は、互いの息がかかるほど近くにあった。

「どんべえ」

何度目かの呼びかけに応じて、どんべえは左手を僕の膝にかけ、おずおずと口を差し出してきた。

「そうか、そうか」

僕がアグラをかき、舌で彼女の口を舐めてやった。

するとどんべえは、からだ全体で甘えを示し、小きざみににじり寄ってきた。そして僕の舌を無心に吸い始めた。

ちくしょう。泣けてくるぞ。

涙が滝になった。とめてとまらぬ涙。糸になって流れ落ち、頬から口へ入り、それをどんべえが舐めた。

接吻をかわしながら、僕はどんべえの右手を持った。

やはり腫れていた。内出血だろうか、骨折だろうか。

そっと撫でてみる。どうか骨折ではないようにといのりながら。

もう、何も考えられなかった。僕は左手でどんべえの右腕を持ち、右手でさすり続けた。

その間もどんべえは、いよいよからだを密着させて、僕の口を吸いつづけた。

クマの舌は長くすべっこい。それが僕の口の中でやわらかく動き続けた。

口の周りに生えている粗毛が、唇をくすぐる。鼻の下がむずがゆさを通り越して、痛くなった。

次第に僕は妙な気分になった。当代一の美女、それも接吻の名手に、正面からとりつかれている感じがした。

動物は人の口を好むものだが、これまで一度も性的な感じを持ったことはなかった。けれどもこれほど長いと、ちょっぴり性的な快さがなくもない。

不思議だった。しばらくさすっているうちに、どんべえの腫れはあとかたもなく消え失せてしまった。と同時に、どんべえは眠気を誘われ、僕の口を吸いつつ目をつむって睡魔に身を任せてしまったのだった。

僕はその背をなでながら妻に報告した。

「おい、よくなったよ」

「え」

「治ったのさ」

「そう。良かったわね」

「ああ。心配させやがって、こいつ」

万感が胸に迫って、僕は夕食も忘れ、どんべえを抱き続けていた。戸外はすでにどっぷり暮れ、風に驚いたカモメが、ときどき素頓狂な声で騒ぐ。

と、妻が言った。

「わたし、2、3日、霧多布へ行ってくるわ」

「え？」

「見てられないのよ。あなたとどんべえのそんな姿が」

こうしてその夜から、僕は1人のイノシシになった。■



雨もよいの夕暮れ　こうした散歩のあとに事件は起こった

山路でのであい 2

熊

文とえ　串田孫一

谷川岳がこんなに賑やかにならない頃は、熊をねらっている猟師によく出あった。里へ下りずに、1人で山中に頑張っている。彼らは、猟師でない私には、熊のいる穴の位置をずいぶん詳しく話す。その穴の上に、熊に感ずかれないようにしのび寄って、出入りの時をねらうと言っていた。

ある猟師は私に鉄砲を見せ、銃身がこんなに曲がっているので、どうもまずい、鉄砲を持っていたら安く譲ってくれないかと言った。ともかく彼らは熊に関係のある話しか出来ない。

新潟県の山中の温泉宿の年寄は、もう自分はだめだがと言って、昔の話をひと晩中きかせる。兄弟ふたりで熊狩りをしている時、穴に向けて一発撃ったが、手ごたえがあったので、死んだものと思って穴へ入ると、熊が待ち構えていて格闘になり、組みついたまま谷に落ちた。その時の熊の爪あとが120あると言って裸になって見せた。120の傷が一斉に痛むのだから、地獄で鬼にいじめられているようなものだと話していた。

信濃川の支流になるが、中津川の上流の山へよく通った。1958年の2、3、4月と積雪の多い頃によく出かけた。谷に入ってから幾つかの部落を通るが、次第に顔見知りが出来た。その部落の1つで休んでいる時に、2匹の子熊が犬とじゃれて遊んでいた。それはまことに可愛らしかった。

やはり猟師が親熊を撃ち殺した時に、傍にいて離れないその2匹を連れて来て飼っているのだ。まだ檻に入れる必要もなく、雪の上でころげ回って遊んでいた。抱きあげてみても軽く、あばれもせず、両腕に1匹ずつ抱くと、私の頬を右左から、なまあたたかい舌で盛んになめた。

私はこういう種類の幸福を味わったのははじめてで、有頂天になった。山を歩きながら、山のけものたちを、一度も殺そうと思ったことはないのに、彼らは必ず逃げる。見るとおり1人じゃあないか、両手をあげ、ほら何も持っていないじゃあないか、そう言いながら幾ら説明をしてもみんな逃げてしまう。だが今は、両手に1匹ずつ熊を抱いて、熊は私をなめてくれた。私はそれから山奥へ雪を踏んで入りながら、この匂いを残しておけば、どんな熊に出会っても、何とか話しあいがつきそうに思った。



1958年3月、新潟県中魚沼郡大赤沢にて

それが危険なのだとある人が言ったが、どうも諦め切れない。ある時、私は熊と人間の子供が仲よくなる童話風の話を書いたが、こんな話を読んで育った子供が大きくなって、山で熊にやられるような事件が起こったら、君も責任をとるつもりなのだろうねと言われたこともある。どうも私は熊に関しては叱られるめぐり合わせにあるらしいが、金太郎のように大きな熊にまたがって、山から下りて来るようなことが何とか出来ないものだろうか。

山では想い出してみると、数回は熊を見かけているが、いずれも100メートル以上は離れていた。ちらっと見ただけで藪を分けて行ってしまったり、なかば雪にうまって器用に走るところを見せたりしたが、それ以上こちらに興味を示してはくれなかった。■　（哲学者）



飼育自慢 7 キバノロ

多摩動物公園

英語では〝Water Deer〟すなわち「水のシカ」と呼ばれている。中国の揚子江流域や韓国の大きな川の河原など，丈の高い草のはえたところに生息している。

シカの仲間だが，雄にもつのがなく，そのかわりに，雌雄ともに上あごの犬歯（きば）が大きく，口の外にはみだして見える。とくに雄のきばは大きく，ナイフのような武器にもなっている。

ふつうシカの仲間は，1産1子のものが多いが，このキバノロは例外で，1産で2，3頭，多いときには7頭にも及ぶ多産ぶりを見せる。また，ふつうのシカは立ったまま乳を飲ませるものだが，キバノロは，イノシシやイヌのように，からだを横たえて乳を飲ませることがある。

そのためか，キバノロの赤ん坊は，乳を飲むときに前肢をばたつかせ，母親の乳ぶさを押すしぐさをする。人工保育であっても，哺乳の際は同じような動作が観察できる。

きわめて神経質な動物で，繁殖期には雄がきばを鳴らしながら，人間に立ち向かうこともよくある。現在，多摩動物公園にいるものは，韓国のソウル動物園から，動物商の手を経て送られてきたものである。■　（飼育課係長・小森　厚）



〈問〉　ジュウシマツの飼い方を教えてください。

（北九州市・花田裕元・10歳・小学生）

〈答〉　ジュウシマツ（十姉妹）は，飼い鳥のなかではもっとも容易に巣引きのできる種類で，この鳥の巣引きは，他のいろいろな小鳥の巣引きの基本となると思ってよいでしょう。

ジュウシマツは大きく，黒ジュウシマツ系と茶ジュウシマツ系に分けられますが，それぞれから色変わりが出て，並ジュウシマツ，小斑ジュウシマツ，白ジュウシマツ，ハバナ，三毛ジュウシマツ，芸物ジュウシマツなどがあります。

①巣引きに必要なもの

庭箱はジュウシマツ用の木製のものを使用しますが，カナリヤ用でも，金かごでもできないことはありません。庭箱の中には，木製またはわら製のつぼ巣，近ごろでは，紙製やプラスチック製のものもありますが，どれでもよいから入れてやります。さらにえさ入れと飲水器，それに青菜を入れる菜差しと，貝がらを入れるボレー入れをそなえます。

えさは小鳥屋で売っている配合えさを入れてやり，皮つきでも，むきえでもよいのですが，小鳥は皮つきのほうを好むものが多いようです。青菜類は，小松菜がいちばんよいとされていますが，レタス，キャベツ，ハコベなどでもさしつかえありません。与えるときにはよく水で洗い，ひなを育てているとき以外は，1週に1，2回も与えればよいでしょう。ボレー粉はボレー入れに3分の1ほど入れ，1週に1度ほど古いものを捨てて，新しいものを入れてやります。

②営巣から育雛

準備ができたところで，好みの種類の雌雄を入れてやります。ジュウシマツは，生後3か月で巣引きが可能ですから，そのころのカップルを用意すればよいでしょう。10日もすれば新居にもなれるので，営巣産卵をうながすために発情餌として，ふつうのえさのほかに粟玉を別のボレー入れに3分の1ほど入れ，毎日与えます。同時に巣草を少しずつ庭箱の中に入れてやると，雄が数本ずつを口にくわえて巣に運びこみ，数日でおちついた巣をつくります。

粟玉を食べ始めてから7～10日もすると，雌は毎日1個ずつ産卵を始め，5，6卵を生みます。産卵3，4個めあたりから抱卵を開始しますので，4，5卵を生んだころからは粟玉の給与を中止します。いつまでも粟玉を与えていると，雄に追い盛りがきておちついて抱卵をしなくなり，卵を落としたり，中止卵（卵のなかにひなができたまま死んでしまう）ができたりします。

昼間は雌雄交替で，夜間は雌雄いっしょに抱卵をします。抱卵期間は14日間で，ひながかえったら直ちに粟玉と青菜を毎日与えましょう。

孵化後3週間から1か月の間にひなは巣立ちをしますが，それまで両親は協力してひなを育てます。巣立ちをすると，親はそろそろ次の産卵が始まるので，その後10日ほど親鳥といっしょにしてからひなを別のかごに移すとよいでしょう。分離した後，1か月ぐらい粟玉を続けて与えるとよい鳥ができあがります。巣引き中は庭箱の移動をしないように，1か所に静かに置いたまま，おちつかせることが必要です。■　（小鳥の病院院長）

仲間のひろば

わが家のリス

広島にいたときのことです。その日は朝からそわそわと，子どもの帰りを待ちわびていました。子どもがお友だちの家で生まれたリスをもらってくるのです。

「おかあさん，おかあさん」とわが家へ駆けこんでくる子どもの声。手にした箱をのぞくと，リスの大きなまっ黒な目が見えました。「かわいいでしょう。お風呂にいれるのですって。食べ物はアサ（麻）の実とヒマワリの種」と，子どもも興奮した声で話しつづけます。

その晩の大騒ぎだったこと。リスだけがおとなしく，まわりばかりが騒いでいました。からだをつかんでお湯のなかに入れてやると，首だけちょこんとだして，いつまでも気持よさそうでした。よくふいて外に出すと，毛がちりちりして寒そうに見えました。子どものセーターのなかにもぐりこんで，首を出してあたりをながめる姿に，思わず手を打ったものです。子どもからリツコという名まえをもらい，わたしたちといっしょの生活が始まりました。

ある日のこと，主人が飲んでいた高血圧症の薬をなめてしまいました。体温が下がり死んだように眠りつづけ，いくら大声を出しても起きません。わらの巣に綿やボロを入れて暖めてやりましたが，目を離したすきに異変があってはと，結局胸のなかに入れて1日じゅう暖めつづけました。夕暮れになって，リツコは急に起きだし，よく眠ったとでもいうふうに伸びをして水を口にしました。思わずわたしも「リツコよかったね」と呼びかけていました。

転勤で広島を離れるとき，フランシーヌを歌うオカメインコは人にあげましたが，リツコだけは手放せずいっしょに上京しました。「おかあさんの子どもみたい」といわれますが，リツコはわたしのことばがわかるみたいです。今はかわいいリスのおむこさんもきて，キンギョ鉢で顔を洗ったり，お仏壇のお菓子をかじってころげ落ちたり，元気はつらつな毎日です。■

（三鷹市・松田千代子・38歳・主婦）

裏表紙説明

サラブレッド　北海道　鵡川牧場。

ウマ　家畜　子どものころの竹馬　騎兵さん　まちがって踏みつけた馬ふんの記憶　馬力　遠くに聞こえるいななきの声　暖かい白い息　後ろにまわると蹴られるぞウ……

ウマがみんなの生活に関係あったのは，荷馬車の時代――道に馬ふんがかわいていた。東京でも，街のところどころにウマの水飲み場がしつらえてあった。自動車がひしめく以前の，遠いむかしのこと――，馬方さんが，夏の木陰でかいばをやっていた。村では車を引いたり，田でスキを引いていた。

このごろウマを見なくなった。ウマは競馬場のものになってしまった。昭和45年には延べ1220万人がウマを見に競馬場へいった。競馬場以外で見るウマは，野性みあふれるクール・ガイ。■

撮影　今井寿恵

愛育の記＝募集中

たのしい動物のお話を――
かわいいペットのお話を――

400字詰原稿用紙30枚以内。締切りは12月31日必着です。詳細は〒100 東京都千代田区有楽町2の3 朝日新聞社出版業務部「世界動物百科＝愛育の記」係へお問合せください。

▶おことわり　本号『もうひとつの世界』『漢字のふるさと』は休載します。

ギャラリー

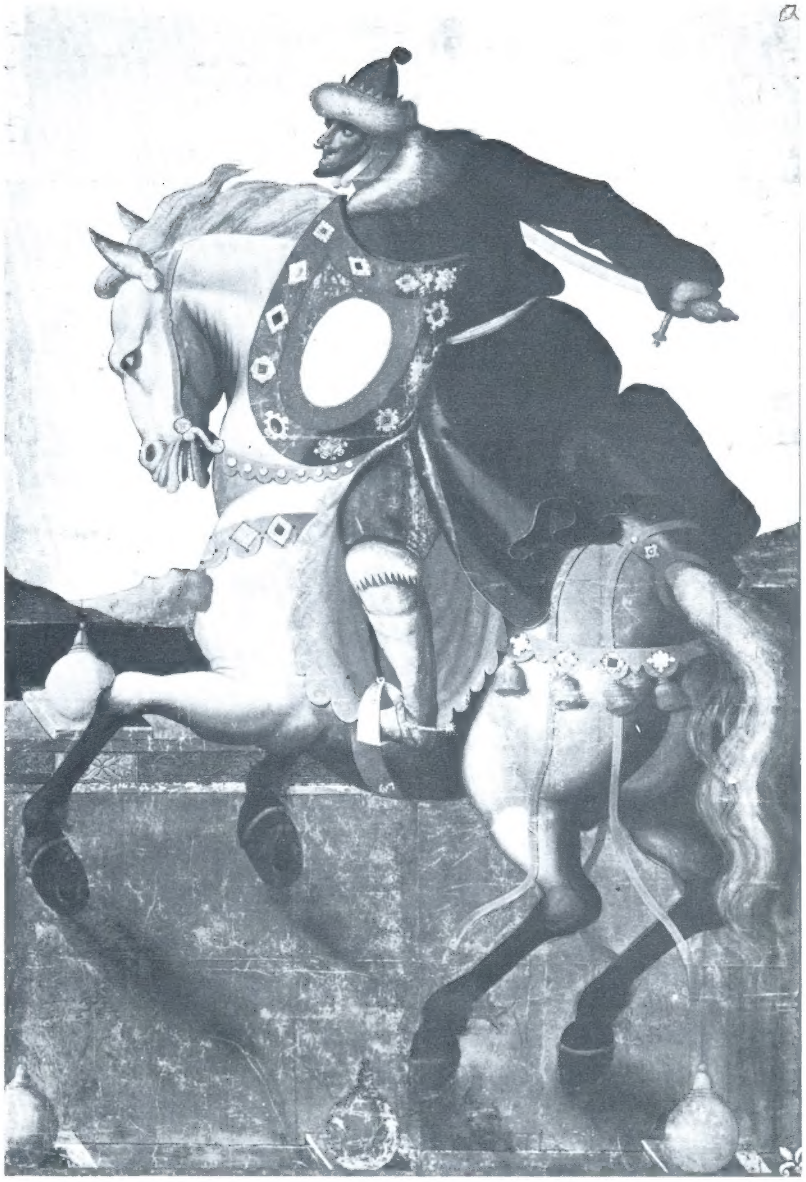
泰西王侯騎馬図

燃えるように輝く金地を背景に，回教とキリスト教の騎士の戦闘を描き出した四面屛風の部分である。この屛風は，四面の左右二面ずつに，それぞれ馬に乗って剣をかざす西欧とイスラムの騎士の姿を向かい合わせに描いているが，ここに掲げたのは，その右端，葦毛の馬にまたがり，緑と赤の地に宝石をちりばめた楯を持つイスラムの騎士の部分である。戦闘図とはいいながら，血なまぐさい雰囲気は少しも見られず，ここに登場する騎士たちは，華やかな衣装に身を固め，見得を切るようにぐっと身構えて，舞台の花形役者のように颯爽としている。馬の方も，それにふさわしく，朱色の鞍覆いに金のあぶみという美々しい飾りで，前脚を蹴上げ，ダイナミックな美しさを見せる。この馬はわずかに斜め後ろの方から眺められたかたちで，短縮法や陰影による肉付けも用いられているが，このような「西欧的」な写実表現も，当時の人びとには目新しいものであったろう。この豪華な屛風絵に，桃山の人びとは，遠い異国への華麗な夢と憧れを養ったのかもしれない。

この屛風では，バックの金地が一部剝落している部分があって，その下に朱を引いてあったことがわかるが，朱の下塗りの上に金を重ねるこの手法は，金地の輝きを増して装飾的効果をいっそう高める。豪奢な色彩に壮大な夢を託した時代が，わが国にもあったのである。■ （高階秀爾）



四曲一双屛風
紙本着色
166.2×468センチ
神戸市立南蛮美術館蔵



第1号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

1 概説 I　生態学，自然保護
2 概説 II　動物分類学，生物学的環境
3 霊長目　ゴリラ
4 霊長目　チンパンジー，オランウータン
5 霊長目　テナガザル，オナガザル
6 霊長目　カニクイザル，ヒヒ
7 霊長目　キヌザル，オマキザル
8 霊長目　メガネザル，キツネザル，アイアイ
9 食虫目　ツパイ，モグラ，ハリネズミ
10 翼手目，皮翼目　コウモリ，ヒヨケザル
11 齧歯目　ヤマアラシ，チンチラ，ミズブタ
12 齧歯目　トビネズミ，ヤマネ
13 齧歯目　家ネズミ，野ネズミ
14 齧歯目　レミング，ビーバー，ハムスター
15 齧歯目　リス，ムササビ
16 齧歯目　ウサギ
17 食肉目　チーター，ライオン
18 食肉目　トラ
19 食肉目　ヒョウ，ジャガー
20 食肉目　ピューマ，ヤマネコ
21 食肉目　イエネコ
22 食肉目　ハイエナ，マングース
23 食肉目　ジェネット，カワウソ
24 食肉目　スカンク，アナグマ
25 食肉目　テン，クロテン
26 食肉目　ミンク，イタチ
27 食肉目　パンダ，アライグマ
28 食肉目　マレーグマ，ホッキョクグマ
29 食肉目　ヒグマ，ツキノワグマ
30 食肉目（家犬）　イヌ概説，盲導犬，警察犬
31 食肉目（猟犬）　グレーハウンド，セッター
32 食肉目（番犬）　日本犬，セントバーナード
33 食肉目（愛玩犬）　スピッツ，チワワ
34 食肉目（野生犬）　ディンゴ，リカオン
35 食肉目　キツネ，ホッキョクギツネ
36 食肉目　オオカミ，コヨテ
37 食肉目　アザラシ
38 食肉目　セイウチ，オットセイ，トド
39 奇蹄目　サイ，バク
40 奇蹄目　ウマ概説
41 奇蹄目　サラブレッド，ポニー
42 奇蹄目　ロバ，ラバ，シマウマ
43 岩狸目，長鼻目　イワダヌキ，ゾウ
44 偶蹄目　ヒツジ
45 偶蹄目　バーバリシープ，アイベックス
46 偶蹄目　ヤギ，カモシカ
47 偶蹄目　ガゼル，インパラ
48 偶蹄目　ブラックバック，ヌー
49 偶蹄目　ローンアンテロープ，ダイカー
50 偶蹄目　バイソン，アフリカスイギュウ
51 偶蹄目　ウシ，スイギュウ
52 偶蹄目　イランド，ブッシュバック
53 偶蹄目　キリン，オカピ，ノロジカ
54 偶蹄目　トナカイ，ヘラジカ
55 偶蹄目　アカシカ，マメジカ
56 偶蹄目　ラクダ，ラマ
57 偶蹄目　カバ，ペッカリー
58 偶蹄目　イノシシ，ブタ
59 貧歯目，有鱗目，管歯目　アリクイほか
60 海牛目，鯨目　ジュゴン，ナガスクジラ
61 鯨　目　イルカ，マッコウクジラ
62 有袋目　カンガルー，コアラ
63 有袋目　バンディクート，フクロネコ
64 単孔目　カモノハシ，ハリモグラ

以下 65～128　鳥類　129～144　両生類，爬虫類
145～160　魚類　161～192　昆虫類，甲殻類

世界動物百科　通巻40号　昭和46年12月12日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



サラブレッド　　説明 30ページ